

---

# 『禁・三国恋姫』

こんたそば

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『禁・二国恋姫』

### 【Zコード】

Z6422Y

### 【作者名】

こんたそば

### 【あらすじ】

後輩が持つて来たゲームをサークル仲間と共にクリアしようとスマッシュを入れた俺は、自分自身が育ててきたキャラクターに憑依した上でゲームの世界に入り込んでしまった。

ヒロインの攻略方も、ストーリーの行方も分からぬがやれることはやつていくしかない！

目指せ、ハッピ・エンド！！できればヒロインと添い遂げたい！！

## プロローグ

プロローグ

俺こと、北郷一刀はとある大学の3年生。

専攻は教育学部、趣味は歴史。戦国時代や三国志などのことが話題に上るとちょっと燃える。

1年生の時に『歴史研究同好会』というサークルを立ち上げて、日夜資料を読み新しい発見を模索して……いるようなことはない。趣味の合う友人や後輩と共に会話して盛り上がりったり、戦国武将や三国志の英雄をモチーフとした漫画やゲームをして楽しい時を過ごしたりしている。

最近、特にはまっているのが後輩の篠塚健治が持つて来た『禁・三国恋姫』というHロゲである。

ちなみに媒介はDCPドリーム・キャスト・ポータブルという小型の携帯ゲーム機だ。DCPの魅力は無線ネットワークを使い複数の人間で同じゲームをプレイし攻略できること。

『禁・三国恋姫』というのは、一昨年辺りにパソコンゲームとして発売され、バグや修正を経てDCPにおいて発売されることになったもので価格は新品で8860円と高額だが、購入者の反応は上々である。

ヒロインは全員可愛いし、そのヒロインたちと絡むシーンCGもかなりエロくて最高である。

ただ、そこまで行き着くのにほんと長い過程がある訳で……。

- ・ まず、プレイヤーは自身の分身となるキャラクターを作成する。
- ・ その後、自身が所属する勢力を選ぶ。【蜀・魏・吳・袁・漢・南】の中からひとつ。
- ・ 難易度は南蛮が『Very Easy』、袁家が『Easy』、劉蜀が『Normal』、曹魏が『Hard』、孫吳が『Very Hard』、漢王朝が『Maniac』となっている。
- ・ ネットにアップされるシーンCGは南蛮か、袁家、もしくは劉蜀の三つの勢力がほとんどで曹魏や孫吳はもとより、漢王朝のシーンCGがアップされるのは見たことが無い。つまり攻略者がいないわけだ。
- ・ ちなみにプレイヤーキャラクターがヒロインたちと接触できるようになるためには、キャラクターのレベルを上げて能力値を上げ、將軍又は軍師として登録される必要がある。つまり、周回プレイは必須。加えてひとつの勢力で使用できるのは1人のキャラクターのみ。しかも他の勢力では使用不可といつ鬼畜ぶり。
- ・ 俺たち『歴史研究同好会』では話し合いの結果、難易度が『Very Hard』の孫吳を攻略するべくキャラクターをエディットした。ちなみに名前を考えるのが面倒であった為、孫吳ルートのヒロインとして登場しない孫吳の武将の名前をつけることにした。俺の場合は、太史慈だ。真名は本名の一刀を使用。
- ・ そうね、【真名】っていうのは『禁・三国恋姫』の世界観に

あるその人の個性や生き様を表す神聖な名前で、親兄弟や信頼の置ける仲間などにしか教えないものだそうだ。異性に真名を教えるつていうことは、そういう関係になつたという合図らしい。

ちなみに一緒にプレイする人間をここで紹介しておく。

篠塚健治 後輩 使用ヰヤテケタニ名ニ魯森

笛本京一郎 先輩 使用ヰヤエタニ名：徐盛

及川肇 同級生 優用牛 三矢翁名 韓

といった感じだ。真名は俺と同じ姓で本名の名前を使用している。

さつきも説明した通り、『禁・三国恋姫』というエロゲの真髓に辿り着くまでには最低でも2周はしないといけないということで、俺たちは1周目と2周目のイベントフラグを一切無視して、自分の分身たるキャラクターたちの育成に専念した。おかげで2回とも独立後の曹操軍との戦いで敗北しゲームオーバーとなつた。

1周目の時は「まあ、仕方がないや。よし、次だ！」と思つたが…。

2周目の時は「王が不在って何だよ、これ！？緊急事態、王が戻るまで防衛をしてくれ……つて、10万の兵をたつた4000人でとか無理だろ！－はあはあ、王発見？よし、盛り返すぞ！つて、曹操軍の刺客によつて王が討たれた！？孫吳軍の士気がガタ落ちつ－？ふざけんなああああああああ－！－！」ということで、4人で暴れた。

で、本命の3周目に入るわけだ。

「かずぴー、恨みっこなしゃで」

「勿論だとも」

「ふふふ、楽しみだね」

「先輩方、こればっかりは譲りません!」

俺たちは色々とりどりのDCPを机の上に置き、向かい合っている。

「覚悟はいいな、お前ら」

俺の掛け声に頷く3人。

「いぐぞ! 最初はグー、じゃんけんぽん!」

俺：パー

健治：チョキ

笹本先輩：パー

及川：パー

「やつたー！僕は本命の陸遜ちゃんでお願いします」

- ・ 最後に言い忘れていたが、恋人になれるヒロインは1周につき1人と決まっている。ハーレムは不可能ということだ。ただ、無線ネットワークを繋げて一緒にプレイしている人間にはシーンCGが

送られて共有することができる。

結局、俺は負け越したのだが本命であつた孫吳の王である孫策は皆選ばなかつた。俺が彼女を選ぶといつたら、皆に『お前、マジかよ』みたいな目で見られた。悪いかよ、コンチキシヨー。

で、4人揃つてDCPのスイッチを入れたのだが……

気付けば、俺は鮮やかな紅い鎧を身に纏い荒野に立つていた。

健治はどこぞの商人みたいな服を着込みその手には扇、笠本先輩は白い服の上に青い鎧を身に纏い大きな斧を背負い、及川はモンゴルの遊牧民が着ていそうな民族衣装みたいな奴を着ていた。

「「「「」」」は…ど…」」

20年近く生きてきたが一度も遭遇した事の無い今現在の状況に戸惑いながらも、俺は遠くの方に見える山々を眺めて心を落ち着かせていた。

「ありえない」と切って捨てることは簡単だが、身に纏う鎧の感触や重量感、頬を撫でる風の匂いなど現実味を持たせるには十分なものだ。間違いない、考えたくはないが俺たちはゲームの世界に何らかの理由で紛れ込んでしまったのだ。

元の世界に帰れる保障は無いけど、生きていくためによ……って、俺がシリアス風味にあれこれ考えているのに、お前らは向やつているんだよっ！！」

「先輩、考えるよりも先に自分の状態を確認しないとやばいですっ。兵士数がゼロになつてゐるから、ここで賊に襲われたらまずいですって」

「そうか？」

健治はそう言つて緑色のDCPを操作する。よくよく見れば笠本先輩も青色の、及川も赤色のDCPを操作している。

彼らに倣つて俺も手に持つていていた黒色のDCPを操作して、自身の状態を確認する。

「……とりあえず、育ててきた『太史慈』の身体らしいな。これなら、しばらく兵はいなくても大丈夫だろ」

気配を感じて顔を上げると、一貫と笑みを浮かべた笠本先輩が目の前に立っていた。

「そういえば一刀くんって、資金が溜まつたらキャラクターや部下の強化に専念していたよね。ちなみに一刀くんの攻撃力ってどのくらいなの？」

「えーと、……2万と10ですね」

「「「2万！？」」」

俺と笠本先輩がいる所からちょっと離れた所にいた2人も俺の突然の宣言に驚き、作業を中断させて近くにやってきた。

3人が俺のD.C.Pの画面を食い入るように見つめ、頬を引き攣らせた。

## 【ステータス】

名前：太史慈　字：子義　真名：一刀　資金：190

体力：6000 攻撃力：20010 防御力：15000 移動力：200

兵士最大数40000人

武器・名もなき剣（攻撃力：10）

### スキル（自発）

『大号令』▼3：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

### スキル（自動）

『指揮』▼3：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御』▼3：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃』▼3：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「かずぴー、いくらなんでもこれはないわー」

「ゲームバランスの崩壊もいいところですって。確か孫吳編の最大の難関である曹魏軍の曹操でも攻撃力3000に、固有武器『絶』の攻撃力3000を足しても6000ですって。まあ、あちらの大兵士数は100000人んですけど」

「一刀くんの部下も大概チートだよね。その分、コストがべらぼうに高いけど」

「言わないで下さいよ、笠本先輩」

「ハハハハハ」

俺たちは談笑に近い雰囲気の中、自分自身の状態を把握していった。

「さて、これからどうする?」

俺がこう切り出すと及川と笠本先輩が腕を組んで悩み始めた。

これがゲームの場合、悩む必要もなく孫吳編の主要キャラクターの1人である黃蓋に連れられて、一兵士〇〇一将軍、一軍師として雇用される訳だが。

「ぶつちやけ、袁術軍の客将となつている孫吳軍に行くメリットはないですよつて。資金半分と兵を雇うコストが2倍になるのは痛すぎです。特に北郷先輩には」

健治が皮肉を交えて言い放った言葉に及川と笠本先輩は大きく頷いた。

くそっ、別にいいじゃないか。最強無敵の軍つて憧れるだろ。

「ここで僕は、最初の内は孫吳軍に加わりずに建業などの街で太守となることを提案するつて。この世界では官位をお金で購えたはず。ゲームをやつていたときは孫吳編にどうせ行くのに無駄な選択肢だなって思つていたけど、今現在の状況なら自由気儘に動ける拠点も得られて、兵力や資金を集めるのに丁度いいと思つて」

「うん。その流れで進むつていうことは孫吳軍が袁術軍から独立した辺りで同盟なり、不可侵条約を結ぶつてことか」

「憧れのヒロインと生身で絡めるつて思つていたけど、それよりも自分の命の方が大切ですから」

確かに……と健治の言葉に俺自身同意する。

あの小麦色の母性を中心に色々な所を俺の自由にしたいっていう気持ちは勿論あるが、それよりも生きて元の世界に戻りたいつしていく気持ちの方が強い。

「当面の方向性はそれでいいかな？」

と、 笹本先輩が俺たちの意思を確認するよつに見渡す。

「それでええと思つで。ワイとしても、拠点があるほうが動かしやすいんや、アレ」

及川はどこか遠くを見ながら了承の言葉を発した。そういうえば、及川のキャラクターってどういう方向性だつたつけ？ 健治は完全に内政向きなキャラクターだったし、 笹本先輩のは奇襲をかけて敵の数を減らすことに特化していたはず。及川のキャラクターが活躍していたのつて……反董卓連合の時の関攻めの時か。つまり攻城戦得意なキャラクターつてことだよな。

でも、それがなんであんな態度になるんだ？ あいつの武器つてなんだつたつけ？

「それじゃあ、先輩方。資金50000で、建業の太守の座と官位を買いますよつて。ほちつとな」

【ピロリン　『太史慈』は『建業の太守』となつた】

「5万をポンつと出すとはすげえ…………つて、太史慈つて俺じや

ん！？」

周囲を見れば3人に「何を今更」的な眼で見られていた。

「王は一番強い者を置いておかないと拙いでしょう。固まるのも偶にはいいけど、今はさつさと建業に向かうよ。太守さま」

「そいやで、かずびー。色々とせなんことは山ほどあるんやからな。ま、太守の場合は文字通り山の如くあるんやろうけど」

「先輩、僕らも“少し”は手伝いますから、頑張って生き残りましょっね。余裕が出来たら、ヒロインとにゃんにゃんしたいですって」

「健治！本音が駄々漏れだぞ！！」

「大丈夫です、ワザとですからって」

おいおい。生き残れるのか、このメンバーで。先々が不安だ…。

## 一話

### 二話

健治の資金500000を払い、俺は建業の太守となつた。

建業といえば孫吳の本拠地となる場所ではないかと思うかも知れないが、孫堅が生存していた時の本拠地は荊州の長沙であり、孫策らが袁術軍の客将となつたのなら寿春の近辺にいるだろう。

俺が建業の太守となつてはじめてやつたのは、コニットの作成だつた。資金は健治持ちで。

IJで『禁・三国恋姫』のコニットについて説明しようと思つ

- ・ まずコニットの追加についてだが、国のレベルによって生み出せるコニットのランクや種類が変わつてくる
- ・ 現在はレベル1の状態なので、一番弱い『新米指揮官』コスト：150を作成しようと思う。
- ・ その後作成したコニットに名前をつける。今回は分かりやすいように【田中】とつけておいつ。

【ピロリン】

名前：田中

体力：300 攻撃力：160 防御力：120 移動力：100

兵士最大数：100人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

- ・ 作成したユニットは一度作成したら消去できない。代わりに、最大100人まで作成できる。ただし周回プレイには持ち越せないので、そこら辺は注意しよう。

- ・ 部下になる兵士もここでつけておく。が、現在の建業の街に必要なのは戦闘に必要な兵士ではなく、俺たちの街を築く要員となるわけで…、今回は建築スキルを持つ市民兵をつけておく。

名前：田中隊 兵種：市民兵

体力：3 攻撃力：2 移動力：100 コスト：6（1人につき）

スキル（自動）

『建築レバ3』：建物をすぐ速さで建てることが出来る。兵士数によつて効率があがる

- ・ と、まあこんな感じである。

ゲームであれば、ユニットを量産して建築や農業・漁業、武器防具開発など片っ端からやれたのだが、悲しいかな。この世界には俺たちと同じように生きている人間が多く存在する。彼らを蔑ろにして建業の発展はない。

ということで、最初は建業 자체を住みやすい街に変えたいと思ふ。

俺たちは公共事業として、街で暇していた若者や仕事が無い者たちを雇つて、メインストリートの拡張をして人通りを楽にした。その際、立ち退いてもらつた方々には田中隊が立てた別の家に移り住んでもらつたり、メインストリート脇に建てた店に入つてもらつたりした。

街道整備なのが、これは他の街と道を繋ぐことで流通をよくするために必須なのだが、今のところは近くの村に伸ばす程度にしておこう。

治安をよくするために元の世界でいう交番を建業の街の至る所に作つた。何かあつたときのためにいくつかの交番には『新米指揮官』のユーニットを何体かおいておくとしよう。

内政に関しては次の機会にでも……といふことだ。

「健治の財布はとんでもないことが分かつた所で、笛本先輩…ゴホン。徐盛、各地の状況を説明してくれ」

「一刀くん、慣れないのは分かるけどしつかりしてよ。まあ、いいや。とりあえず、僕の兵たちを各地に散らばらせて分かつたことだけど、長沙の太守の名前は孫文台っていうんだってさ。年代に関しても『禁・三国恋姫』の舞台よりも結構前みたいだよ

「それじゃあ、しばらくの間は内政オンリーだ。しかと農業や漁業、武器防具の開発等をやって地力をあげておけっていうゲームの

「そもそもの啓示やる。商業に関しては健治がやるやうつかい、ワイは開発関係をやるかな。先輩は何をします？」

「ううだね、今まで通り情報管理と農林水産関係は僕がやろうかな。一刀くんは、一般兵士の鍛錬つていう所じゃない？」

「「「ま、太守の仕事をきつちつやつてからの話だけ（ね・つて・な）」」」

「それひどくね！？」

結局、俺の意見はまったく取り入ってもらえず、部屋に戻った俺は仕方なく判子を右手に、【ぺたこん】【ぺたこん】と印を通した書類に判を押していく日々。

それから暫く経った、雲ひとつ無い青空でお洗濯日和だなあと窓の外の景色眺めていたある日、

「大変ですって！海賊が現れましたー！」

息を切らしながら健治が俺の執務室に走りこんできた。

俺は素早く自分のD.C.P.を手にとつて画面を見る。すると画面には『Warrior』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、敵の情報が浮かび上がった。

【白鬚海賊団】 兵士総数5万

海や河に面する街や村を広範囲で襲う海賊団

官軍において、団長である白髪（名前は不明）には手を出すなどいわれるのはどう危険な力を秘めているらしく

『戦いますか？ 戦いませんか？』

・ 戦うなら戦争パートに移ります。

・ 戰わないなら、国レベル・資金・住民感情が激減します

「……健治、こんなイベントってあつたか？」

「記憶にござりませんって。どうします？」

「そんなの戦争するに決まっているだろ？ 俺の地道な政務結果をこんな簡単に潰させて溜まるか！ 健治、お前の資金で俺の兵を10体生み出してくれ。ここに喧嘩を売るということがどんなに愚かかつていうことなのかをその身に刻んでやる……」

【ピロリン　『太史慈隊』が発足しました。現在10人】

「よっしゃあああああー逝っていくぜええええーー！」

俺は武器を片手に走り出す。その後ろに白髪で動物の顔を模した面を被った屈強な青年たちも続いてくる。負ける気がしないぜっ！！

「……先輩、ストレス溜まつてたんだなあ」

## 備考

名前：太史慈隊 兵種：強化兵

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100  
0（1人につき）

## スキル（自動）

『援護防御』▼3：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇  
『援護攻撃』▼3：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

## 【VS白鬚海賊団】

- 『勝利条件
- ・敵軍の戦力を70%減少させる
- 敗北条件
- ・建業の街（本拠地）への敵軍到達』

DCPに映し出される勝利敗北条件の確認を行つた俺は自軍の戦力を冷静に見据える。現在の段階で5万という戦力とともに戦えるのは俺たちくらいだ。街の人と新規ユニットの組み合わせが戦場に出ても戦果は期待できない。

「えーと、こちらの戦力は俺（太史慈隊）と…徐盛隊。街の防衛は及川：じゃなくて韓当隊が務める。3部隊だけじゃ心細いから警邏隊をいくつか建業の街付近に配置しておくとして、作戦としては俺が最前線で敵の数を減らして、徐盛隊が討ち洩らしを確実に仕留めるのがいいか」

「一刀くん。それは方針であつて、作戦じゃないからね」

「……本職の軍師ほしーな」

俺はそのことを切実に思った。

という赤い文字が表示され、敵軍の侵攻を確認した俺は自分（太史慈）のスキルである『大号令LV3』のことを考えた。

この『大号令LV3』は自軍の攻撃力を15%上昇させる上に、自分の最大兵士数の15%にあたる人員を毎ターン補充することが出来る。使用回数は『LV』と同じため3回である。つまり『大号令LV3』を行えば、俺の最大兵士数である4000人に達するのだ。及川や健治にチートとか、これはないと、ゲームバランスの崩壊とか言わるのはこれが原因である。ただし、ゲームの時は選べば良かつたが、この世界に俺が存在している場合どうすれば発動するんだろうか？とはいっても今現在の太史慈隊のステータスでも

『太史慈+太史慈隊 体力：7000 攻撃力：21010 防御力：15000 移動力：200』

このくらいはあるのでぶっちゃけ、ただの賊程度では話にもならんのですよ。

敵軍は川岸に着けた艦隊から続々とユニットを出していっている。

敵軍のユニットをランク別にするところな感じである。

- ・ LV1：『海賊団・小隊長』 & 『海賊下つ端兵数500人』 の組み合わせが60組

- ・ LV2：『海賊団・中隊長』 & 『海賊下つ端兵数1000人』 の組み合わせが10組

- ・ Lv3: «海賊団・幹部» & «海賊下つ端兵数2000人』の組み合わせが5組

### 【敵軍ステータス】

『名前：海賊団・小隊長 体力：560 攻撃力：640 防御力：60 移動力：144 最大兵士数：500人』

『名前：海賊団・中隊長 体力：1340 攻撃力：800 防御力：300 移動力：156 最大兵士数：1000人』

『名前：海賊団・幹部 体力：2500 攻撃力：2600 防御力：1050 移動力：168 最大兵士数：2000人』

『名前：海賊団下つ端 体力：8 攻撃力：6 移動力：156』

となっている。

という訳で、今回の白髭海賊団の戦力を数値化すると、

Lv1が『体力：4560 攻撃力：3640 防御力：60』

Lv2が『体力：8340 攻撃力：5600 防御力：300』

Lv3が『体力：18500 攻撃力：14600 防御力：10』

となる訳である。

見て分かるとおり、体力と攻撃力はずば抜けて高いが防御力は紙同然。これは『禁・三国恋姫』に出てくるほとんどのユニットにいえることだ。確かに戦いにおいて体力も攻撃力も必要だ。だが、それ以上に必要なのは防御力といえよう。何せ、そのユニットが生き続けるかぎり、その部隊は死なないのだから。

「とりあえず、最前線に行つてきますね。後のことはよろしくお願ひします」

「了解したよ、一刀くん。僕としても皆が住む建業の街を滅茶苦茶にされるのは望む所では無いしね。……では、太史慈さま、皆に聞こえるよひ印令を」

俺は徐盛の言葉を聞き頃いた後、全軍の前に立つた。そして、歩兵たちに向かって大音声を張つた。

「全軍、武器を取りれ！」

『ガアン』と銅鑼の音が鳴り響き、待機を命じられていた兵たちの視線が俺を捉えていく。

ちなみに銅鑼を鳴らしたのは、脇に控える徐盛である。

俺を見つめる兵たちに向かって、俺は建業の太守として、皆の命を預かる将軍として、可能な限り悠然と構え、朗々たる声を張る。

「これより我らは、街に迫り来る脅威、海賊団をここで迎え撃つ！」

先陣を務める自分の部隊と徐盛の部隊、街を護る及川の部隊に、戦いを始めて経験することになる元々は農民や商人だった者、そのすべてに聞こえるように俺は精一杯の声を張つた。

「奴等は街を襲い、金品や食料、女子供を我らから奪い、己の私利私欲を満たそうとしている獣だ。奴等は己の目的を果たそうと數を以つて攻め立ててくるだろう。だが、恐れることは無い。その為に我らがいるのだ。建業に住む人々は我らにとつて家族同然。家族が危険に晒されようとしているのであらば、命を賭けて守り抜かなければならぬ！命を奪うことに臆するな、兵士たちよ！諸兄らの罪は建業の太守である俺が全て背負う！行くぞ、同胞たちよ！我らの家族を護るために！己が剣に誇りを持つ者よ、我に續けええええ！」

1

———才才才才才才——！」」」

即座に大仰な歓声をあげたのは俺の部隊と徐盛の部隊だつたが、すぐに戦勝は兵たちにも伝播し地鳴りのような波となつて周囲に拡散していく。無我夢中で言つたため、もうほとんど覚えていないがよかつたのかな？

【ヒロリン スキル『大号令』▼3】が発令されました】

「…つて、スキルを発動させるためには毎回「んな」とやらないといけないのかよ」

「何を言つているのか、初めてにしては結構よかつたんじゃない。  
見てみなよ、兵士たちのあの燃える炎のようによる気になつた姿を  
さ。皆、君に感化されたんだよ。一刀くん、君はもう立派な皆の代  
表だよ」

先輩はにこやかに微笑んで、最後にこう付け加えた。

「君が僕たちの《王》で本当に良かったと思つよ」

と。

砂埃を巻き上げ、建業の街を襲わんと迫つてくる海賊たちの先陣がまず見たものは、燃える焰のような鮮やかな紅い鎧だつた。だが、その鎧を身に纏つ兵士は1人や2人ではない。目に映る敵兵全員がそれを着込んでいる。

その兵たちを率いるよう集団の前に悠然と立つ男がいた。

無能な指揮官が馬鹿な真似をしているのだと考えた海賊たちは意気揚々とその男に襲い掛かつたが、その認識が間違つていたことに気が付く。ただし、気付いたのは仲間が瞬きする間に殺されるのを見た他の海賊たちだ。

男に襲い掛かると同時に幾つもの首が刎ねられ、宙を舞い、ボトボトと地に落ちて荒野の砂で死に化粧を施される。

「突撃！」

何が起こったのかを理解できていない海賊たちの耳に、男が指揮する声が響いた。

男の後ろに控えていた紅い鎧を身に纏つた兵士たちが、地鳴りを上げながら殺到する迫力に海賊たちは耐えられない。

男に対して恐れ慄いていた兵たちも、本能で勝てないと悟つたのか、

その場を一田散に退いていく。勿論、彼らに背を向けて。追撃する形で、紅い鎧を身に纏つた兵たちが海賊たちを蹂躪していく。

「建業の街を狙つた不届き者め、ここから生きて帰れると思つなよ！」

指揮官の男が放った言葉に海賊たちが悲鳴を上げる。

まだ、海賊団との戦いは始まつたばかりだ。

## 四話

白鬚海賊団との戦闘の最中、僕は最前線で奮戦する大隊での後輩である一刀くんの背中を見ていた。そして、思つ。

「ふう…。一刀くん、飛ばしそぎだよ」と。

僕はこの身体（徐盛）の武器である『凍てついた戦斧』を肩に担いで溜め息をついた。何せ開戦して間もないというのに、太史慈隊だけで敵軍の約35%近くを葬っているのだ。彼が戦果を上げれば上げるほど、味方の士気は否応なしに上昇する。

「一刀くんは昔からそだつたよね。君の声や立ち振る舞いは、やけに人を惹きつけ好感を抱かせる。ふふっ、…僕もその一人」

その“人を惹きつける力”によつて僕たちが生み出した兵ではない、この世界の人々である兵たちに作用し、人數的には劣つていたのに逆に彼らの士気を高める結果に結びついている。それがどうやって身についたのかは知らないが、この状況下において、指揮官として得がたい資質といえる。

「すかした顔し『ヒュンッ』てつゝ『バギッ』

僕は近くに寄つてきて斬りかかつてきた海賊の1人の身体を横に真一文字に薙ぎ、上半身と下半身を分離させる。そして身体を回転させ遠心力をつけた一撃を斬り飛ばした上半身に叩き込み文字通り粉砕する。辺りに血が飛び散つたが、何のことは無い。僕自身、既に

何人の海賊を殺してしまつていて、命を奪うことによる罪悪感や嫌悪感はほとんどない。もはや、元の世界に無事に戻れたとしても普通に生きていいくことは不可能だらう。

敵兵が幾分か少なくなってきたなど感じた僕は、自身のDCPを確認した。案の定、敵の残存兵力は50%を切っていた。

「先輩として、少しは一刀くんの負担を減らさないとね」

僕は武器の戦斧を大きく振りかぶつた。そして、精神を集中させ前を見据え言い放つ。

「吹き荒れる、氷結の結晶。碧風……衝破つ……」

冷氣を纏つた風が戦場に吹き荒れ、一刀くんたちに武器を向けていた海賊たちの動きを止めた。その直後、風を受けた海賊たちの全身から血が噴出した。一刀くんが不思議そうな表情を浮かべこちらを見てきたので、とりあえず僕は彼に向かつて笑顔でサムズアップしたのだった。

目の前で戦っていた海賊の全身から突然、血が噴出した。

一瞬にして血の池地獄を作り出した元凶を見ると、いやにイイ笑顔で親指を立ててサムズアップしていた。

「何かをするんだつたら、最初に言つてくれよ

と、愚痴をこぼしていると

## 【ピロリン】

と、音が鳴った。DCPを確認すると勝利条件であつた敵の兵力を70%削ることに成功したようだ。勿論、建業の街への被害はゼロだ。俺たちの完封勝利と言つても過言では無い。勝鬨をあげようとした俺の目に、トンデモナイ文字が映つた。

『名前：白髭海賊団・團長 体力：？？ 攻撃力：50000  
防御力：50000 移動力：500 総兵士数：0』

俺の黒色のDCPの画面に映し出された『白髭海賊団・團長』のステータスを見た俺は戦場にいる太史慈隊以外の兵士たちに大音声で撤退の指示を出す。

「俺たちが殿を務める！全軍、建業の街へ撤退しろ！徐盛は韓当隊と協力し籠城の準備を行え！全警邏隊は住民の避難誘導だ！一刻を争う、全員動けえええ！！」

俺はそう言つた直後、DCPを操作して今までの戦いで得ることが出来た資金を使って、自身のステータス強化を行う。上昇させるのは総兵士数だ。

「……海賊団の奴等を結構倒したと思っていたけど、総兵士数を200しか上げられない。……スキルの使用回数が3回に戻つていることだけでもありがたいと考えるか」

「一刀くん、僕も残るよ」

忍者のような格好をした部下を引き連れて笠本先輩、…徐盛が側に

来た。

「駄目だ、先輩。徐盛のステータスじゃ、瞬殺される。それよりも街に戻つて軍全体の指揮を執つてください。正直、健治と及川の2人だと、心もとないんですよね」

そんなことはない。2人とも俺とは違ひ優秀だ。健治がいなければ建業の発展はなかつた。及川がいなれば、兵士たちは弱くて脆い装備で戦場に出なければならなかつただろう。けど、2人はまだ人を殺していない。

俺は自分の掌を見た。今日のこの戦いで随分と血に汚れてしまった。

1人目を殺した時は足が震え、胃の中のものを全て吐き出しそうになつたが、2人、5人、10人、100人と殺した数が増えるごとに覚悟が決まっていくのを感じた。

俺は此処にいる。

この世界に存在している。

俺は建業という街の太守で、護るべき民が、大切な仲間が俺の後ろにいるのだ、と。

「一刀くん……分かつたよ。けど、僕がやるのはあくまで代行。必ず戻つて来るんだよ」

「こんなところで死ぬつもりはありません。俺がこの手で殺してしまった命も、俺の後ろにいる護るべき人たちの命も、全て背負つているんですから。戦いで死ぬわけにはいかない」

俺がそう言つたら、徐盛は目を剥き、そしてすぐに眼を擦つた。

「ははっ、今一瞬だつたけど、大勢の武官や文官を従えて指揮を出している一刀くんの姿が垣間見えた気がする。うん、君はまだ死んではならない。いや、こんなところで終わるはずが無い。僕が保障する」

「先輩……。ありがとうございます」

「それじゃあ、僕たちは街で君の帰りを待つことにするよ。スキル『瞬転法陣』発動！」

先輩がそう言つと彼らの身体が光に包まれ消え去つた。ビリヤー、味方の所へ一瞬で移動するスキルらしい。

「……一回、先輩たちのキャラクターステータスを見せてもらおう。スキルを把握していないと、何が出来るかわからないじゃないか」

「隊長、敵が来ます」

犬の面をつけた青年が俺に報告してきた。見れば、砂埃を上げて突進してくる物体があつた。

「全軍抜刀！死力を尽くせ！だが絶対に死ぬな！奴に勝つて、俺たちは全員で帰るんだ！」

「「「「オオオオオオオ！」」」

俺たちは大地を力強く蹴り、向かい来る敵を迎撃つた。

兵たちの士気を高め、俺自身集中し心を静めていたのだが、敵である『海賊団・団長』の姿を見た瞬間、俺の頭の中は『全く理解できない』といつ異常事態の為にフリーズ寸前だった。

こんなことを予想できるか？

俺たちは命を賭けて戦ってきた。

街を、民を、家族を、仲間を護るために必死になつて戦ってきたのだ。

そして、海賊団の団長が兵を率いずに現れた。

「こまではいい。

俺たちは覚悟を決めて、ここに残った。

だがしかし！

だがしかしだ！

ボディビルダーの如くに鍛え上げられた逞しい肉体“こ”、白いビキニのトップスと褲、そしてマントのみを羽織った変態が現れるとか！

誰が予想できるか？！

アレの全体を視界で捉えた瞬間、怖気が走ったわ！

たぶん、無感情、無反応を誇る我が太史慈隊の精銳もしっかりと後退りしていたから、俺の感性がおかしくなったわけではない。

代表として、敢えて言わせてもらおう。

「変態が来たぞーーー！」

「誰が変態じゃ……！」

「お前に決まっているだろうが、変態じゃ『不満なら化け物だよ！』

「んなああんじやとおおお！誰が何年も掛けてやつと咲き誇った満開の桜の木をも一瞬にして散らせてしまひほどバケモノじやとおおおお……！」

「ヤ」まで言つておらんわあああああー！」

俺の蹴りが白鬚海賊団の団長の顔に炸裂した。『ズシャアアア』と砂埃を上げて滑つていく変態を見据えた俺は、太史慈隊に命令する。

「総攻撃チャンスだ！起き上がれないくらいボゴボゴにじりーーー！」

「「「「「解ーーー！」」」

殺せと言わない限り、俺自身分かつていたのかもしれない。この変態はどんなことがあつて死なないってことを。

総攻撃中

「隊長、剣が刺さりません」

「どうあれ、殴つてや」

総攻撃中

「隊長、殴つたそばから回復してこります」

「見りや分かる。全員全力で攻撃だ」

総攻撃中

「隊長、隊員のほとんどが疲労で動けなくなっています」

「正真正銘のバグキャラじやねーかよー」のオッサン

「オッサンではない! 漢女おとめじゃ! ...」

「どの口がこの女ってこいつんだよ、このボケエエエ! ...」

本日2発目の蹴りが変態の顎を捉え、そのまま宙を舞う海賊団の団長。そして落ちると同時に鳴り響く機械音。

【ペロリン『白鬚海賊団・団長』の『卑弥呼』を倒した】

俺はひじに映し出された文字を見て、フリックと眩暈がした。

邪馬台国の中女がなんで海賊をとか、何でこの時期にいんのとか、

色々と考えなければならないことがあるんだろうけど、何故に女性であつた卑弥呼がこんな筋肉達磨のオッサンになるんだろうか。

……まさか『禁・三国恋姫』では、名立たる武将が女性になつた影で、元々女性だった武将が男性になつてしまつているのか？

まさか、孫吳の一喬と呼ばれた大喬・小喬も、弓腰姫と呼ばれた孫尚香も男性化してしまつてこりつてこりうのか？

「知りたくなかったよ、そんなことはやー」

俺は膝を抱えて落ち込むのであつた。

そんな中、俺の後ろでは太史慈隊がせつせと縄や鎖を使つて、氣絶したオッサンを拘束しているのだが、もうじきばくばくつとれてくれ。必ず、復活するから。

## 五話

白鬚海賊団の団長である卑弥呼を名乗るオッサンを、捕虜として建業の街へ連れ帰った俺たちを待っていたのは祝勝の宴だった。広場の中心で音頭を取っているのは、変な関西弁をしゃべる悪友の韓当局及川肇である。

「…………」

何も言い出せずにただただその光景を眺めいたら、『ガシッ』と脚に衝撃が走った。

いや、そのまま下を見ると街の子供たちが俺の脚に抱きついてきたのだ。そして、『ヒヘヘ』や『モモヤヤン』とした満面の笑みを浮かべて俺の顔を見上げてくる。

「おおう。我らのHが帰還したよ! やーー建業の太守さまのお帰りじやーー皆のもの、胴上げじやーー!」

文面が色々とおかしい。及川の奴、すでに酔っ払っていやがるつて、おおう! ? いつの間にか俺の周囲を屈強な男たちが囮んだと思つた瞬間、俺の身体は宙を舞つていた。『ぼーん』、『ぼーん』、『ぼーん』……と、胴上げされること10回。俺は音頭を取つていた及川の隣に降ろされた。

「かずぴー、ほれ」

そう言つて、及川が俺に手渡してきたのは黄色のメガホンだった。

「太守さまの言葉、皆が待つてゐるんやで。格好いいとこを見せてやりい」

まあ、結局戦場では勝鬨をあげることが出来なかつたし、丁度良いか。そう思つて、渡されたメガホンを及川に投げ返す。及川は『おい、かずぴー?』と不思議そうな表情を浮かべていたが、これは俺には必要ない。

民衆を見渡せば、誰もが口を紡ぎ、俺の言葉を待つてゐるかのように広場は静まり返つてゐる。

俺は目を閉じて大きく深呼吸する。そして、密集した彼らの一人ひとりに「届くよう」、その背後にいる兵たちにも届くように、精一杯の声を張つた。

「諸君、此度この街を襲おうとした脅威は屈強なる兵士たちの手によつて退けられた。それも1人の犠牲を出すことなく。しかし、これからもこの街が危機に陥ることがあるだろつ。だが、俺たちが此処にいる限り、この街に住む人々は必ず護る。護り抜いてみせる!だから、諸君らも我らを信頼し、力を貸して欲しい」

俺はここで一度、言葉を区切る。そして、ニヤリと笑つて及川がその手に持つていた杯を奪い取つた。その中には並々と酒らしきものが注がれている。

「諸君、今は武器を捨て、杯を手に取れ!今宵は皆で楽しもうではないか!天に向かつて叫べ、街全体に聞こえるように叫べ、俺たちは今此処にいるつていうことを示せ!……それではいくぞ!かんぱ

「かんぱーい！」

民衆は俺の掛け声で次々と酒を飲み干していく。子供たちも大人の真似をして、何かを飲んでいる。

そんな中、俺は杯に注がれていた酒を一気飲みしたつもりだったが、これってただの水じやね？と首を傾げていた。すると苦笑いを浮かべた及川が寄ってきた。

「皆、ノリノリやなー。本物はこっちにあるけど、飲むか？かずぴ

「いや、いい。というか、この宴を企画したのは及川か？」

「ちやうで。ワイはただ盛り上げ隊長に任命されたから、音頭を取つていただけやねん。ほれ、あそことかあつちの方とか出店が結構出ているやろう? あれな、この街の商人やなくて篠塚が呼び込んだ、別の街や村で商いをしている連中なんやそうや」

「はー。健治は相変わらず凄いな」

「せやな。でも、今回の殊勲賞はやはりかずぴーやる。D C Pで確認しておったけど、50000の70%つまり35000の海賊と化け物みたいなステータスを持っていた海賊団の団長を倒したんやろ？凄すぎやで」

「あっ…。すっかり、忘れていた。ソレ、捕虜にして連れて帰つてきているんだわ。後で、尋問するから健治も誘つて、俺の執務室に来てくれ。先輩には俺が直接言いに行くから」

「了解や、任せとこ」

及川と別れた俺は建業の街の住民や兵たちとの激しくも楽しい宴の一時を過ごしながら、この街のどこかで飲んでいるであろう先輩の姿を捜し歩き、……迷子になつた。迎えてくれたのは先輩の部下の忍者で、ちょっとだけ可哀想なものを見る目で見られた。面倒をかけてすみません。

「で、かずぴーの執務室に来た訳やけれども。なんやねん、この口に出すのも憚られる肉の塊は？」

「今回の海賊団の団長、自称『卑弥呼』だ」

「うわあ、それはさすがになつて。おじさん、嘘は駄目だよつて、そつまつて健治は縄と鎖で簾巻きにされているオッサンの所へ行き、ポンポンと頭を撫でる。

何でだらつか、猛獸を前にして『カシコイイ』とか『吼えて見せて』つて言ひ元の世界の子供を思い出す。

「ワシの名前は卑弥呼なのは最初からじやーお主ら、外史の管理者のひとりであるワシをこんな目に合はして口で済むと思つたー」

「……外史？ 管理者？ なんやそれ？」

及川が聞いた事の無い言葉を繰り返して言ひ、びつやり俺たちが当たりを引きて当てたらしこ。

そして、卑弥呼は踏んではいけない地雷を堂々と思い切り踏みつけたようだ。なにせ先輩と健治の田が卑弥呼の言葉を聞いた瞬間に据わり、口端がやや釣りあがつたから。

「外史っていうと民間で書いた歴史のことだよね。つまり、三国志をモチーフとしたこの『禁・三国恋姫』といつゲームの世界もまた外史のひとつに含まれるということ。だが、三国志をモチーフとした物語は何もこれだけじゃない。漫画もあれば、小説もある。ゲームも様々な種類がある。つまり、人の数だけ外史は存在する。それの管理者っていうことは、僕たちが何故ここにいるのかっていうのもわかるはずだよね」

「なんじゃと？」

「恍けたり、隠そつとしたりする必要は無いよって。僕らは西暦20XX年の世界でこの世界観をもつゲームをやっていた身なのだからって。というか、何で僕らがこの世界に来る羽目になつたつているのさ？」

「そんなことがあるはずはない。君ら、名前は？」

「笛本京一郎」

「篠塚健治」

「及川肇や」

「北郷一刀」

「…………ほんじつ…かず…と”？……ミスをしおつたな、管轄の奴め

卑弥呼の繩を解き、話を聞くといふな感じじらし。

・ 『この世界には』『天の御遣い』と呼ばれる存在がいる。

- ・ その天の御遣いは俺たちプレイヤーとは違つ勢力について行動する

・ 設定では俺たちと似たような世界出身らしく、未来（現代）の知識を使ってその勢力に有益な情報を与えて万事ことが上手く進んでいくようになります

・ そして、問題なのはその『天の御遣い』の名前が『本郷一子ほんじょうかず』

といつらじ

「つまり、管理者のニアミスで一刀くんと彼が扱っていたDCPと無線ネットワークで繋がっていた僕らもこの世界に招かれたっていうわけか。うん、ふざけたことを言つのはこの口かな？」

『ざむむー』と卑弥呼の口端を横に引っ張る先輩をどうにか押さえつけ、俺は彼に話の続きを促した。俺たちが知りたいこと。つまり、元の世界への帰還方法だ。しかし、彼の口から出た言葉に俺たちは唖然としてしまつ。

「ワシは知らん。この世界でのワシの役割は、周回プレイのキャラクターがいる街を襲つて、資金や街のレベルを下げることがじゃから。元の世界へ云々に関しては管轄外じや」

その言葉を聞いた先輩と健治は米神辺りを押さえ眉を寄せ頃垂れる。

及川は場の空氣を読んで俺の所に静かに寄ってきて、耳打ちしてきた。

「どうするんだ、これから？」

「とりあえず、当初の予定通り、ゲームをクリアするつもりでやつていいくしかないだろうな。もし、クリアしても帰ることが出来なかつた時のことを考え、この世界に骨を埋めることも視野にいれてやつていかないといけないわけだし、これまで以上に内政や外交に力を入れていく必要がある」

「やうやな。むしろ、最初から諦めておつた方が、気が楽やわ。それにこの世界も結構住み心地がええし」

「それは同感だ」

「つむ。様々なご主人さまを見てきたが、お主のよつなのは初めてじや。……よーし、ワシに勝つたことじやし、褒美としてコレをやらう」

そう言つた卑弥呼は襪の中に手を入れて、金色に輝く籠手を取り出した。

隣にいた及川は執務室の入り口へ避難してしまつている。

『ああ』、『ああ』、『ああ』と言わんばかりに迫り来る白きカイゼルヒゲと筋肉隆々の身体。俺はあつという間に部屋の隅に迫いやられ、目の前には金色の籠手が差し出されている状態。

これを取つたら、人として大事なものをひとつ失つてしまつ氣がする。そんなことを考えながらも迫り来る恐怖に耐えられなくなり、俺はソレを受け取つてしまつた。

卑弥呼は頬を赤らめ、

「おお、『主人さまがワシの金色の珠で作った籠手を……』

と言つて身体をクネクネさせる。

先輩や健治は完全に引いているが、及川は「ううー、かずぴーはいい奴やつたのにー」と俺を煽るようにわざとらしく泣いている。

『プチッ』俺の頭の中で何かが切れる音

フフフツ、イイダロウ。メニモノヲミニセテヤルオオオオオオオオ!

素早く金色に輝く籠手を装備した俺はスキルを即座に発動する。

「東方不敗が最終奥義!せきはアッ、てええんきょおおおけええええん!」

『キュボツ』という音と共に自身のエネルギーと自然エネルギーの両方を凝縮した一撃は、壁と天井を軽がると破壊し、雲を切り裂き空の彼方へ消えていった。勿論、俺の目の前で頬を染め、身体をくねらせていた卑弥呼も一緒にだ。

俺は部屋の入り口で呆然と立っている3人を一瞥すると

「これは海賊団の団長が所持していた宝だ。そういうことにしておけ。これは命令だ」

と、いつもより若干低い声で言った。

3人は軍人がやりそうな敬礼をビシッと決めて

「「「了解しました」」」

と、言ってくれた。

フフフツ、卑弥呼。いいものをくれたね。お礼に今度見つけたら、所構わず、コレをぶつけてやろう。

フフフツ、クククツ、ハーハツハツハー！！

「終わり方が何処かのラスボスみたいだよって、先輩」

獲得品

武器『金色の籠手』（攻撃力：50000 防御力：50000）

スキル（自発）『石破天驚拳レバ1』：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

## 六話

六話

文字通り山のように積まれた書簡を次々と処理している俺のところに、少し困惑気味の文官がやってきた。

「あの、太史慈さま。少々、お時間宜しいでしょうか」

「どうしたんだ?……まさか、まだ増えるのか?」

俺は文官との間に積まれたままになつてゐる書簡を見て、最悪の展開を思い浮かべる。

「いえ、太史慈さまに謁見を求める人物がいるのです」

「俺に?」

「はい。何でも“軍師”として雇つてもらいたいとか

「採用」

「は?」

「採用するから連れてきて」

「はあ…、分かりました。では失礼いたします」

俺に頭を下げる執務室から出て行く文官を見送った俺は背伸びをし

て骨を鳴らした。そして思ひ。

『やつと、この地獄から抜け出せぬ』と。

わざわざ軍師として雇ってくれと言つてきているのだから、一般人  
だつた俺たちよりも兵法においても一芸を持っているだろう。それ  
に軍師を希望しているのだから心配しなくとも政務能力も高いはず  
である。

幸先いいな…………と、思つていた時期がありました。

「よろしくお願ひします～。太史慈さま～」

俺の執務室に入つてきた少女を見るまでは。

妙に間延びした声、若葉のような薄緑の髪、眼鏡として本当に機能  
しているのか疑わしいものをつけた未来の孫吳の筆頭軍師、名を陸  
遜といつ。もちろん『禁・三国恋姫』の孫吳編に出てくるヒロイン  
の1人だ。

俺は、ゴクリと喉を鳴らす。何故つて？彼女を見る上で絶対に視界に入つてしまつたわわに実つた“モノ”の所為だ。

何がたわわなのかは言つ必要も無いだろつ。彼女が動くたびに揺れ  
るアレのことである。振り返る。揺れる。椅子に座る。揺れる。呼  
吸する。揺れる。何かとつけてとにかく揺れる。何がつて……言え  
るわけが無い。

この世界に来てまともに息抜きが出来ていない俺にとって、彼女の  
モノは凶悪すぎるっ！！

「どうかしましたか？」太史慈さまへ

そう言つて首を傾げる彼女。揺れる。

『ゴンツ』

俺は机に頭を打ち付けた。そして思い出すのは爺ちゃんがピンチに陥つた時によく言つていた魔法の呪文。

「心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。  
心頭滅却すれば、火もまた涼しいいいい」

俺は立ち上がり壁に『ゴスゴス』と頭を打ち付ける。

「心頭滅却、煩惱退散、南無阿弥陀仏うひひひつーー。」

しばらくお待ち下さい

額から血を『ドバードバ』流した状態で、陸遜に軍師として採用することを伝えた俺は早急に3人を執務室に呼んだ。そして、事の次第を報告したのだが、

「阿呆や。阿呆やと思つていたけど、これはさすがに拙いやん」

ぐはあ…

「素直に言えばもの凄く嬉しいんですけど、これって喜んでいいんですかって」

健治、お前だけでも幸せに…

「孫家が袁術の密将になつた場合、彼女たちの独立がまた一步、遠のいたことになるね」

『サクッ』と先輩の一言が俺のガラスのハートに突き刺さる一言を放つた。だが、俺にも意地があつた。

あの後俺を待つていたのは、彼女の期待するような眼差し、口元を追い出されたら私には後がないんですけど訴えかけるような雰囲気。俺が答えるのを躊躇つていると次第に涙が溢れそうになつて……。女の武器・泣き落とし

「なら、あの状態でどうしようと…」

「「「太守としては間違つてない（んや・つて・よ）」「」」

「はい？」

及川は俺の肩に腕を回して話しかけてくる。

「事実、現在の建業にある文官の中にはワイらに意見していくつな剛の者はおらん。それは一見、ワイらの好きなように改革することができるように見えるけどな、誰かがストップを掛けてくれへんと調子に乗つてしまつのが人間なんや」

さすがに心理学部に通つていた人間の言葉だけはある。

「僕たちは現代の知識を使ってなんとかやりくりしているけど、あ

ちらで常識なことがこちらでは非常識なことばザラにあるんですって。彼女が軍師として僕らの中に入ることによって、彼女の常識が僕らの非常識を正してくれる可能性があるんですねって

と、健治が俺の正面に立つて身振り手振りを使って説明する。

「つまり、彼女が入ることによってメリットは多くあれど、デメリットはないんだよ。“僕たち”には」

「うう…、孫家には手痛いダメージがあるってことですか？」

壁に凭れ掛かつたまま話をする先輩に俺たちの視線が集まる。

「それはそうだろうね。史実では孫策は呪術で、周瑜は病で亡くなっていたはずだから、陸遜の存在は未来の孫吳にとって必須のはずなんだよ。というか、長沙で『江東の虎』といつ異名で有名な孫文台というビッグネームが存命なのに何故新勢力でもある僕らの元に彼女は来たの？」

先輩に集まっていた視線が俺の方に集まつた。彼女が俺たちの所へ来た理由。それは確か…

「自分の能力を思う存分に發揮できると思うから…だつたかな？」

「へー」

「……」

「なるほどね。つまり、孫文台の所には有能な武官や文官が多いるので自分に活躍する余地が無い。ならば新進気鋭で将来有望かつ、

流星の如く江東の地に現れ建業の太守となり街を凄い速さで発展させていっている太史慈の元で、自分がどこまでやれるのかを試してみたっていうところかな?」

結局、俺の判断は正しかったってことなのか?

孫家に対しても非常に申し訳ないとをしてしまった訳だけれども。

「IJの段階で陸遜がそういう風に考えたってことは、頭のいい連中は孫文台と太史慈を同格に見ているってことだね。荊州の東側に長沙がある以上、揚州にいる豪族は距離的に建業の太守である太史慈を選ぶだらうしね。江東を孫文台と一分にする存在として」

ふふふつ、と不気味な笑いを洩らす先輩の姿に怯える健治を慰めながら、俺は彼に尋ねた。

「これからどうするんですか?」

「ん?今まで通り、領地を広げていくだけさ。5万という途方も無いくらい強大であつた白鬚海賊団を完全に退けたって言う話は揚州全体に尊として広まつていてるから、何もしなくとも同盟やら臣下として加えて下さって言ってくる輩はこれからどんどん増えていくと思つよ」

なんだかことが大袈裟になつてきた気がする。って、最初からか。  
うん、諦めて仕事をしよう。

「ある程度戦力が集まつたら、山越賊を取り込むのもいいかもしないな。一刀君なら、単騎で……」

先輩がなんだか恐ろしいことを話しているが聞こえない。あー、聞こえないったら、聞こえない！！

七  
話

「どうしてこうなった」

俺の思ひはこの一言に集約される。

先日の陸遜加入の際に先輩が言つていたことが本当に起こり、規模の小さな村々はさつさと「貴方様の支配下においてくだされ」と贈物を持参し、揚州の最東端に位置する漁業の街である吳や会稽の太守たちがこそつて建業を訪れ、同盟を申し込んできた。戦力的には完全にこちらが2つの街の兵力を足したものをお全くに超越しているため、軍門にいれてくれとお願いされているようなものだった。

それだけなら、俺の執務室が書簡に埋め尽くされて締め出されるだけで済んだであろうに、なんと俺は現在、三越族と対峙している。本当に、どうしてこうなった。

- ・ 昨日分の仕事を終わらせて、久しぶりに寝台で横になつた俺
- ・ 起きたら繩でグルグル巻きにされ荷台の上に転がされていた
- ・ 状況が分からず目に目を白黒させていたら、見覚えのある忍者の服装をした人が…って、先輩の部下の人じゃん！？
- ・ 無造作に投げ渡される件の『金色の筆手』。これを見るたびに白きカイゼルヒゲを思い出し、心中で怒りの炎がふつふつと燃え上がるのを感じる

・ 縄が解かれ、「それでは頑張つて下さい」と告げた忍者の人は田にも映らない速さで俺の前から去っていく

・ 仕方なく籠手を装備したら、俺を取り囲むようにして現れる目つきがヤバめなお兄さんたち

・ 状況が分からぬがファイティングポーズを取る俺 イマココ

「手前、最近建業の太守になつていい気になつていやがる太史慈つていう奴だろ。はん、1人のこのこ乗り込んでくるとはい度胸だ。まずはオレが相手してやるよ」

そう言つて現れたのは空色の髪と爛々と輝く金色の瞳が特徴の少女。その拳には濃い青色の籠手が装備され、身体には所々戦や鍛錬でついたと思われる大小様々な傷跡が見える。

「オレの名は、巖虎。手前の名前はいいぜ。どうせ、ここで骸になるんだからなあああ！」

素早い動きで俺に迫つてくる少女。そして、その勢いのまま左足を思い切り踏み込んで体重を乗せた一撃を俺の腹部に向けて放つた。

「…………」

「…………？」

それから10秒くらい経つた後、髪や服が汚れるのもかまわずに地面を「じゅりり」と転げまわって悶絶する少女。

周囲を囲んでいた男たちの顔がにやにやした表情から一気に青白くなるのを俺は見た。

「て、手前の身体は岩かなんかかよ！」

「ただ単に能力<sup>ステータス</sup>が違うだけだろ。大体、右ストレートっていうのはな、こう放つんだよっ！」

俺はここでふと思った。普通のパンチを放った所で、こいつらが納得するとは思えない。有無言わさずに黙らせる方法……。俺は太陽の温かな陽光を浴びて光り輝いている金色の箸手を見た。

そうだ、あれをやろう。

俺は自身のエネルギーと自然エネルギーを練つて鍊つて煉り固めるイメージで集めていく、そして集めたエネルギーを右手に収束して放つ。俺にとってはただこれだけのこと。

ただし、俺の周囲でことの成り行きを見ていた者たちは全然違つて見えていた。

なにせ、俺が突き出した右腕から発射された光が地面を抉り、海を割り、最終的には『ドドーン』と弾け飛んだのをその眼でみることになつたからだ。

「これが、俺の必殺技『石破天驚拳』だ。ただの右ストレートだけでもこいつたことが可能なの……って、どうしたんだお前ら！？」

いつの間にか俺を取り囲んでいた男たちは綺麗に統率の取れた状態で整列し土下座していた。

無論、彼らを率いていた少女も額を地面に擦り付けそうな勢いで土下座している。

「師匠！ オレたちを、いやオレを弟子にして下さい…ようじくお願ひします！」

「… ようじくお願ひします！…」

「お、おう。任せろ」

彼らの勢いに飲まれて咄嗟に了承してしまったが、果たしてよかつたのだろうか？

・ 山越族の特徴。強者の言つことは絶対。かつ山越族の女性は己より強い雄に惹かれる。

『名前：厳虎 体力：1900 攻撃力：2800 防御力：16  
50 移動力：182 総兵士数：1000人』

『名前：山越族・若人集 体力：14 攻撃力：16 移動力：1

25』

『名前：厳虎隊 体力：15900 攻撃力：18800』

【ピロリン『厳虎隊』が『太史慈軍』に加入了】

厳白虎隊が張ったキャンプで一夜を過ごしていた俺は、鎧の間に挟

まつていた紙を見て頬を引き攣らせた。

『指令書

山越族の現主要メンバーである黄乱、尤突、藩臨、費棧、巖虎、巖興の6人をぶつ飛ばして、配下にして連れ帰つて下さい。  
それで山越族の問題は解決です。

徐盛より

「あの人は鬼か」

巖虎隊に連れられて山越族の族長が治めている街にやつてきた。

当然山越族の人間たちは部外者である俺を上野動物園に連れて来られたパンダの如く、物珍しそうに見ている。

「師匠、ここから先がオレみたいな将軍が住んでいる地域です。気を引き締めて下さい」

巖虎の言葉通り、俺を射抜かんと鋭い視線を向けてくる者がいる。俺が視線を感じたほうを見るとすぐにその姿を隠してしまうのだが……。すると突然、巖虎の歩みが止まった。正面を見ると、濃い紫色の髪を束ね、大きな槌をその手に持つ妙齡の女性がいた。雰囲気でいふと『禁・三国恋姫』の劉蜀ルートに出てくる顔巖みみたいな。

「何をしておる? 専よ。……そして、後ろの男は誰じや?」

「千代の姐御!」

「その呼び方はやめないとおもるの？」

厳虎はその女性と一言、一言会話し、こじらひに振り向いて笑みを浮かべながら駆けてきた。俺はその健気な姿に、犬耳と尾を生やした彼女の姿を垣間見た。間違いない、厳虎は忠犬属性だと思つ。

「兄貴、千代の姐御が話を通して、族長に会わせてやるつて」

「や、そつか。ありがとうな」

俺はそう言って、彼女の頭を撫でた。すると、

「く、くう～ん」

と、厳虎は喜びの声？を上げるのだった。大丈夫なのか、これで…。非常に不安に駆られる俺であった。

⋮  
⋮  
⋮

「不安的中かい！」

俺が連れてこられたのは、ローマにて競技場として使用されていたような円形のコロッセオ。俺はそのコロッセオの中心で観客席に座つている大勢の山越族の視線を浴びせられる。俺はその中で装備している籠手の具合を確かめる。

「くそつ、これで死んだら先輩を呪つてやる」

そんな愚痴をこぼしながら俺はその時を待っていた。その時、客席に詰めかけていた山越族の人々の声を上から塗りつぶすように、けたたましい銅鑼の音が鳴り響いた。同時に、ものものしい装備の兵士たちが現れて、ぽつかりと空いていた上方の客席を埋め始めた。

「…………なんだ？」

いきなり完全武装した兵士たちが現れて、最初から観客席に座っていた山越族の人々は困惑している。観客たちの間に少なくとも動搖が走ったのはいうまでもないようだ。

「 静まれ！みんな者、静まれ！」

空いていた客席の上から3分の2が兵士たちによって占拠されたころ、兵士たちの叱咤とともに、長く艶やかな黒髪を首の後ろ辺りで束ね、黒鞘の剣を佩いた妙齡の女性が現れた。その毅然とした振る舞いは他にいる兵士たちとは格が違うという事が一目で分かる。

耳を澄ますと「ハンリンサマ」という声が聞こえてきたので、山越族を仕切る主要メンバーであることは間違いがなさそうだ。だが、彼女が現れるのはどうやら珍しいことらしい。どうにも話を聞いていると彼女は族長を護衛する役職についているそうだ。ということはつまり…。

俺は、藩臨の頭上のボックス席を凝視した。

いかつい取り巻きを連れて現れた彼女は眉を寄せ、目を閉じたまま

で何か一席口上をぶつけることもなく、兵士たちの方からもそれ以上を語るようなことはなかつたが、観客の目がそちらに向いてしまつてゐるのでもづ言つまでも無いことだ。あの御簾の向いの側に、山越族の長がいるといふことだらうといふことを。

で、俺の現在の状況なのだが……

「ぐう……」

「があああ、いとえ、いとええよおお

「じほつ、じほつ」

山越族の男連中を相手に無双しているといひだ。

最初は虎とか猪とかが出てきたんだけど、俺が睨むと服従のポーズを見せるんで頭を撫でておいた。

それに納得がいかなかつた観客の若い男たちが「俺たちがやつてやるぜ」とこつた雰囲氣で降りてきたので、全員に一発ずつ拳を叩き込んだ。結果はこの状態。鎧や兜をつけずに俺の所へやつてきたもんだから、被害は尋常ではない。しかし、観客のボルテージはかなり高い。

俺にやられた男衆がこんなにボロボロになつていても「大丈夫か」つていう一言もないのは、この山越族も能力が女尊男卑なのかもしない。が、何だか気に食わない。

こいつらは一度俺と戦い、俺の強さを知つた。その上で立ち上がり、俺を倒そうと迫つてくる。まあ、返り討ちにしている俺が言つのも

なんだけど、根性はあると思うんだ。少なくとも、安全な観客席で俺たちが戦うのを肴に飲んでいる連中に比べれば。

「くそお…

俺を倒すために降りてきた青年が膝をガクガクと揺らしながらも立ち上がり、両拳を上げファイティングポーズを見るのを見た俺は彼に話しかけた。

「なあ、なんでそこまで必死になつて戦うんだ?」

「部外者であるお前に囁ひまでも無い」

「観客席を見る、お前たちを肴に酒を飲んでいるよつた奴等だぞ。悔じくないのか?」

「…………

青年は俺の問いに黙り込んだ。周囲を見渡せば、俺に倒された連中全員が痛み以外の理由で顔を歪め、唇を噛み締めている。

「山越族は強者の言つことは絶対……だつたな。だが、本当は違うんじゃないのか?男という理由だけで、一兵卒以上になれないとか……つて、そんな驚いた表情をするつていうことはマジか!?」

「う、ああ。その通りだ。そこに見えるだろ」

そつまつて青年は、山越族の長がいるであつたボックス席を指差していた。

「今回、族長となつた奴が『我的部下は女のみでいい。男は壁にでもなつていればいいんだ』という方針らしく俺たちには出世の道がないんだ。俺には故郷に病で床に臥せる両親がいて、どうやってでも稼がないといけないのに」

「……お前らも？」

俺は周囲にいる男衆を見て言つた。返ってきたのは強い領きだつた。

「だったら、歯向かえばいい。そんなの族長じゃないってな」

「それが出来たらしている！だが、族長を護る護衛官の藩臨さまは我らのような奴等が1000人、2000人集まつたところで倒せる人間じゃないのだ！」

「ちょっと、待て……」

俺は懐からDCPを取り出して、藩臨のステータスを確認する。

ちなみにこれもれっきとした戦争パートのようで、目の前にいる青年の名前は『悟道』というようだ。ステータスも中々高い。先日、俺の弟子となつた厳虎の約1・5倍の能力を持つていた。

『名前：悟道 体力：2500 攻撃力：3400 防御力：2500 移動力：150 総兵士数：1500人』

鍛えればまだまだ伸びしきがありそうだ。

で、肝心の藩臨のステータスだが、なるほど悟道の言つことも分からんでもない。確かに凄い能力だ。

『名前：藩臨 体力：5000 攻撃力：12000 防御力：1  
0000 移動力：300 総兵士数：0人』

ステータスを見終えた俺はDCPを懷の中に入れなおして、大きく息を吸い込んだ。そして、コロッセオにいる全ての人間に聞こえるように大音声で言い放った。

「族長の護衛官である藩臨！お前に一騎打ちを申し込む！」

俺の放つた言葉に「コロッセオにいた全ての人間が動きを止めた。渦中の藩臨は今まで閉じていた目を『クワツ』と開き、燃え盛る紅蓮のような瞳を露にする。そして

「……承知した」

と言つて立ち上がったと思つたら、その場から忽然と消えていた。

「「「うおっ！？」」「

俺の後ろにいた男たちから驚嘆の声が上がつた。つまり、彼女はあの一瞬でそこからここまで移動したということになる。なるほどね…。

「これは厄介そうだ」

「お前の力……私に見せろ！」

そう言つて彼女は黒鞘から彼女の瞳と同じ色をした剣を抜き、俺に切りかかってくる。

振り下ろされる藩臨の剣を正面から受け止める。剣と籠手がぶつか  
り合つて火花を散らす。

「やべえ、卑弥呼にもらったこの籠手じゃなかつたらまともに受け  
切れなかつた」

俺は素直にそう思った。

なんと強烈な一撃か。3周目のチートというゲームの加護を受けた  
俺の両腕をもつてしても、その一撃を受けると同時に体中が痺れる  
ような衝撃を受けた。しかし、俺も建業という街を治める太守、た  
だではやられない。彼女が剣を構えなおす一瞬の隙をついて、彼女  
の肩に一撃をいれようとするも寸前で避けられてしまった。

「……ひつ

「……ひつー?」

藩臨は振り回すよう強引に剣を振る。俺はそれを左腕だけで受け  
て、右拳を彼女に向かつて放つた。しかし、彼女は凄まじい速さで  
剣を構え直し俺の一撃を防御することに成功した。それはまるで剣  
ではなく小枝を扱っているのではないかと思わせるほど、流麗にし  
て迅速な行動だった。

俺と彼女の一騎打ちは果てしなく続く。

最初は野次を飛ばしていた観客だが、いつの間にか静かにこと  
の成り行きを見守っていた。武に覚えがあるものは固唾を呑んで見  
守り、山越族の民は最強の護衛官である藩臨の勝利を信じて祈るよ

うに見ている。

「……はつ……はつ……はつ。……お前、強い」

「うん？ ありがと。でも、そろそろ決着をつけようか」

「……承知した」

藩臨は剣を正眼に構えた。

俺は両手を向かい合わせるようにして構え、自身と自然エネルギーを練りこむ。

「吼えろ、竜吼砲！」

「石破つ、天驚拳！！」

大勢の山越族の人間が見守る中、俺と藩臨が放った攻撃はコロッセオ中央にてぶつかり合い、一瞬拮抗したかと思ったがそれはすぐに終りを告げた。俺の『石破天驚拳』の光の濁流が藩臨の『竜吼砲』と彼女の身体を丸ごと飲み込んだ。そして、彼女の後ろの観客席にいた人間全てを巻き込んだ。

光が消えた後に残されたのは、膝をついて俺を見上げる彼女と、観客席でぐつたりとしている観客たちと兵たちだ。族長がいたと思われるボックス席は吹き飛んでしまって何も残っていない。

「……私の負けだ。……殺すがいい」

自身の剣を俺に差し出して目を閉じる彼女の姿は、毅然としていて

かつ凜々しかつた。こんな彼女を簡単に死なせるわけにはいかない。

「厳虎に聞いた。山越族は強者の言つことには絶対に従わなければならぬ、と。ならば命じよう、藩臨。俺の手足となり戦場にてその力を發揮せよ。それから悟道やお前たちも俺が治める建業の地へ家族を伴つて來い。悟道、お前ならば、我が軍の將軍になることも夢では無いだろ?」

「……承知」

「御意!」

「「「「「はつ……」「」「」「」」

【ピロリン『藩臨』と『悟道』、『山越族・若人集』が仲間に加わった】

「口ロッセオから出た俺を待つていたのはイイ笑顔を浮かべている厳虎たちだった。

「お疲れ様でした、師匠!」

そう言つて手拭いを手渡してくる厳虎。その後ろには、先ほど一騎打ちを行い俺の臣下となつた藩臨や悟道といった人間の他に、数人が各々立つっていた。

俺が視線を向けると一様に膝をつき、名をあげる。

「我が名は黄乱！此度の戦い、見事じやつた。ワシをお館さまの軍門にいれてくれい！」

「ボクの名は巖興。貴方の強さに憧れました。姉と同様、私も弟子にして下さい！」

「妾は尤突。正直、男の下に就くなんて気に食わないけど、貴方のところで世話になるわ」

「ふわわ、乃愛ちゃん！？そんなことを言って廻しゃないで下しゃい！わ、私は費棟でしゅ。力は非力でしゅが、軍師として役に立たいと考えています！よろひゅくおねがいしましゅ！」

そう言つて俺を見上げてくる4人に加えて、藩臨や巖虎、悟道や男たちといった面々が俺の返事を待つている。

先輩に頼まれていた指令はこれで達成なのかな？

まあ、いいや。これからのこととは建業に帰つてから考えよう。

「俺の名は太子慈、字は子義だ。お前たち山越の民は今田を持つて俺が死ぬまで一蓮托生となつた。難しいことや無理難題なことは命じない。お前たちは全員家族だ。俺が生きているかぎり、お前たちは全力で護る！だから、お前たちも俺を信頼し、その力を貸してくれ！」

「…………御意……」「…………」

こうして、山越族を臣下に加えるという仕事を終えた俺は、新たに仲間となつた将軍候補6人、軍師候補1人、山越族の兵士2万をつ

れて帰路につくのであつた。

山越族の民を仲間にすることが出来た俺は、大手を振つて建業の街へ帰還した。

いつも通りの賑わいを見せる建業に街並みや大勢の人たちを見て、厳虎や黄乱といった面々が感嘆の声を洩らした。

見知らぬ一団を見て、首を傾げる人たちもいたが、率いているのが俺だということが分かると会釈して去っていく。

しかし、そんな穏やかな空氣も完全武装の警邏隊が現れたことで崩れ、一気に緊張が高まつた。当然、仲間たちを護ろうと藩臨が剣を抜き、尤突が黒い帯を束ねたものを取り出した。厳虎や嚴興も拳を握り、悟道もファイティングポーズを取り、あつという間に一触即発と呼べる空氣になつたため、急いで俺が双方を治めようとした時、

「お帰りなさいませ、太史慈さま。遠征、ご苦労さまです」

そう言って、蒼い鎧を身に纏つた青年・徐盛が俺の前まで来て頭をたれた。その姿を見た警邏隊の人たちもすぐに武器を地面に置き、膝をついた。えーと、『部下がいるときは、公私をしつかり分けること』だったな。

「つむ。俺の後ろにいるのは将軍候補6名と軍師候補1名、それと山越族の民2万だ。早急に家屋の手配を頼む」

「御意です。誰かあるー。」

「はつー。」

徐盛の呼びかけで現れたのは、大きな『』を背負つた少年だった。俺は面識の無い少年を見て首を傾げたが、俺の側に控える形となつた徐盛、つまり先輩が耳打ちしてくれた。

「彼の名前は丁奉。一刀くんの噂を聞いて出稼ぎに来た子でね。中々おもしろいスキルを持つていたから、今は僕の副官として動いてもらつているんだ」

おもしろいスキル?と聞いた俺はDCPを操作しようと思ったが、今の状況でそれは拙いかなと考え直し、城についてから確認することにした。ちなみに俺が先輩と話している間に山越族の民は丁奉に連れられて、健治率いる田中隊によつて開発がどんどん進んでいる建業の西側に向かつて歩みを進めていった。

「俺がいない間に何か変わつたことは?」

「特には。ただ細かい所で云えば、魯肅が少し暴走したつてことぐらいかと」

「気になる言い方だな。あいつの“少し”ってどのくらいなのか分からぬんだが」

「簡単に言いましょう。『病院』と『学校』を建てたみたいですね」

「……それは、また。思い切つたことを」

「詳しい話は、城に戻つてからとこり」とぞ

「やうだな。……君たちは、俺たちについて来い」

未だに周囲を警戒する藩臨たちに向かつて俺はそつ言つて、返事も聞かないまま城に向かつて歩き出した。

玉座に座つた俺は大きく溜め息をついた。

「はあ、やつとこつもの調子でしゃべれる」

「ははは、お疲れー」

俺の側に控える先輩が労いの声を掛けてくれるが、今回俺が山越族の所まで遠征に行く羽田になつたのは彼の所為だ。

そのこともあつてジト田で見るが、先輩はどじ吹く風と知らん振りを決め込む。

「師匠。その人は誰ですか?」

生徒が教師に向かつて質問するように右手を『シュバツ』とあげて尋ねてきたのは、先輩に対して疑惑の目を向ける厳虎である。見れば、藩臨や悟道といった面々も先輩に対して鋭い視線を送つている。

「彼の名は、徐盛。立場は、……。何て言つたらいいんだろ?」

「やうだね。僕が一応兵を率いる者ではあるものの、主に行つてゐるのは他国情報収集と領土内の農林水産物の管理つてところだね」

「前者はわかるが、後者はどんなことをやつしめるんだじゃ？」

眉を顰めながら尋ねてきたのは、黄乱である。質問をしたはずの巖虎とその妹である巖興は先輩の話を聞いても、意味が理解できなかつたのか首を傾げている。

「簡単にいえば、太史慈さまが治める領土内の民全員に「食料」を供給するつてこと。僕がやっているのは、その枠組みを作るつてことだけね。興味があるなら、あとで詳しく述べるよ」

「ひむ。頼む、その説明を聞くのはワシと… 費桟でよからう」

「はいです」

黄乱が辺りを見渡して、田が合った費桟に声を掛けた。費桟も気になることがあったのか、黄乱の田配りにすぐに反応した。

「徐盛のことはもういいかな。じゃあ、次は魯肅だ」

藩臨たちの視線が健治を捉えた。健治は、最初いきなり向けられた視線にたじろいだが、すぐに持ち直した。

「……徐盛に聞いたぞ。俺がいない間に、病院と学校を作ったんだつてな？」

「まあ、結局の所そうなつたっていうか、僕もこんなトントン拍子に進むとは思つていなくつて」

そう言って、健治は自分の隣でにっこりと笑みを浮かべる陸遜を見

た。その後、小さな溜め息を吐いた健治はそのまま話し始めた。

「病院についてですが、最初は医術の心得がある者を集めていただけなんですって。それこそ、人体に詳しい者、薬を扱う者、薬草に詳しい者、風土病を研究している者、それから産婆とかありとあらゆる知識を持つ人たちを集めて、情報の集約化を図ろうとしたんですが、その時に丁度近くの村で疫病が発生したと報告を聞いたもので、まあ後はご想像にお任せしますって」

それだけの医術に心得がある人間が揃っていたら、何とかできるんじゃないかって思うよな。

こうやって、健治がここにいて病院を作っている以上、その疫病をなんとかすることが出来たのだろう。

「ちなみにこの病院は、国庫で運営することになったのであしからず」

「つて、おいつ！」

「大丈夫ですよ、せん……太史慈さま。現在の建業は金回りがいいですでの、問題ありません」

「そこから先は～、私が説明しますね～」

今まで静観していた少女はその間延びした独特なしゃべり方で皆の視線を自分に集めた。彼女の隣で、しゃべり終えた健治が額に搔いた汗を、手拭いを使って拭いている。余ほど緊張していたらしい。

「学校に関してですが～、元々太史慈さまが建業の太守になられた際に決めた税収の引き下げが建てる要因のひとつになつたと思われ

ます』

引き下げると言つてもなあ。他の州と同じように一定額まで引き下げただけなのだが？

そりやあ、俺の前の建業の太守はとても見栄を張る輩だつたらしくて、民に重税をかけて貧困化させ、自分達は悠々自適な生活を送つてきいていたらしいので、その頃に比べれば税収は低くなつただろう。

「まあ、税収が引き下がられた」とによつて、生活に必要なものを買つても自由に出来るお金が各家庭に少なからず出来たことにより自分の好きなものを買えるようになりました。そこで健治さまが口をつけたのが、娯楽用品です。子供向けに木を加工して作つた玩具を売つてみたり、女性向けに髪飾りや首飾りといった装飾品を作つてみたりされていたんですが、なんといつても極め付ときは本ですっ……」

はて、今彼女は健治のことを『健治』と呼ばなかつたか？

陸遜は徐々に鼻息を荒くしながら話しが進めるが、その横で名前を呼ばれた健治がソワソワと/or、隣にいる陸遜から少しすつ距離をおいていっているような気がする。

「子供向けに描いた絵本も分かりやすくてよかつたのですが、なんと言つても素晴らしいかったのはちゃんとした物語になつていい小説ところものです。『忠臣蔵』とか『十三人の刺客』とか……はあはあ、内容を思い出しだけで身体が火照つてしまつて、あら～？」

ある程度、陸孫から離れた健治だつたのだが、身体をモジモジし始めた彼女が隣に健治の姿がないことに気付くとキヨロキヨロとあた

りを見渡し、柱の影に隠れようとしていた健治を見つけ口ケット弾の如く駆け出し、彼の首根っこを掴んで引き摺りながら元の位置に戻ってきた。

その際の健治は誰かに助けを求めるように、とても情けない顔になつていたが。

「ともかく、本が素晴らしい訳です！これは皆さんのが読む価値があると思うのですが、困ったことに民の中でも文字を読める人間が僅かで、本屋には在庫がいっぱい残った状態だったんですね。こんな素晴らしい本を読めない人がいるんだつたら、読めるようにしてしまえばいいと思つて、『ちらつ』健治さまの机の中で埋もれてしまっていた『学校へ案』を作つてしまおうと考えた訳です」

「うん。理由がひどく個人的だが、この際どうでもいい。

学校が出来るということは、民が知識を得ることによつて起こるかよつて、こちら側は優秀な人材を見出すことが出来、民側は出世のチャンスを得ることが出来る。学校を運営するに当たつて、教師とか知識人を集めないといけないが、そこら辺は健治の得意分野だろう。

学校を作る上での問題点は、民が知識を得ることによつて起こるかもしれない反乱といったところか。今のところ、給料とか福利厚生とかに力を入れているがどこから不満が湧き上がるか分からぬ。気をつけなおかないといけないな。

「健治さま、一昨日夜伽に行つた際に書きかけの原稿を見かけたんですけど、あれは完成しましたか？」

「　「　「　「　「ふふつーっ」「　」「　」

「ちよつと、穏ー? ななななにを、いきなりー?」

真っ赤になつて慌てる健治とマイペースな陸遜を見て、俺は思つた。

「リア充、氏ね」

「せんぱああああーつー?」

しまつた。口に出して言つてしまつたらしく。しかし、悔しいな。  
後輩が先に卒業してしまつとな…。

ふとあることが気になつた俺は先輩に田配せした。すると、彼はすぐには首を横に振つた。つまり、仲間。次に及川に田配せすると、彼もまた首を横に振つた。ふつ、抜け駆けしたのは健治のみか。

健治に対するお仕置きは何がいいかなと考え始めた、その時

「はいー! 医匠

「ん、どうしたんだ。厳虎」

「『よじが』ってなんですか?」

彼女が発した質問によつて、玉座の間の空気が凍つたのは言つまでも無い。

その質問を聞いた健治は咄嗟に陸遜の口を手で押さえた。それが懸

命だと思つ。

俺は、保護者的立場にある黄乱に田配せした。しかし、彼女はすぐに視線を外しやがつた。

厳虎と厳興は、答えてくれるだろう人を探してキヨロキヨロしながら辺りを見渡している。

夜伽がどうのとか話せる空氣ではないので、俺は意を決して誰かに丸投げする気満々で話しかける。

「あー…。厳虎、その質問はこの軍議が終わつたら、一番信頼している“同性”の人聞いてくれ

「え? はい、師匠命令ならば! よろしく、お願ひします! 藩臨さま

「……よつによつてか」

必死に目を瞑わせないよつとしていた山越族最強の剣士はがっくりと頭垂れた。

俺はてつきり剣一辺倒だと思つていたけど、夜伽はどうこうことなんか知つてゐるんだな、彼女も。

「……私は族長の護衛官だった。……来る時は2桁の日もあった

俺の考へてゐることが分かつたのか、彼女は教えてくれたが、うん。

「かずぴー。その族長は?」

「たぶん、お空の上だ」

「なりええわ」

なんて羨ま……。いかん、いかん。巌虎の変な質問の所為で意識がかなりずれてしまった。

「太史慈さまも、山越族の方々も長旅によつて疲れてこるでしょうから、今回の軍議はここまでとこりつことにしましょひ。部屋の方へは侍女の者たちに案内をせますので、どうぞ、おくつねいわれ」

そう言つて先輩が侍女たちを呼ぶ。けど、彼が呼んだ彼女たちは侍女であつて侍女ではない。全員、先輩の部下である忍だ。足運びが少々独特なため、藩臨や黄乱といった面々は気付いただらう。

で、玉座の間に残つたのは俺と先輩と及川の3人。健治は陸遜に連れ浚われてしまつた。

「しかし、健治が一番乗りか」

「まあ、ムードもロマンチックさも、ほとどなかつたらじよ。なんせ、健治くんは襲われた側だから」

「彼女は本を読むと興奮する性質（たひ）のようでは、篠塚はなんの氣兼ねもなく、彼女に自分が書いた小説の感想を求めたようなや。つまり篠塚は腹すいた狼の前で、自分に調味料をかけてしまつた憐れな子羊やつたちゅうわけや」

「それを聞くとあまり羨ましくないな」

「確かに、最低でも主導権だけは握りたいわな

」「同感だ」「

しかし、これで揚州は完全に俺たちが支配下に置いてしまった訳だが、『江東の虎』はどんな動きを見せるのかね。

同盟か？不可侵条約か？それとも、奪い取るつもりなのか？

どんな事態になつてもいいように、しっかりと準備だけはしている。

明日は、軍部の編成だな。仲間割れはやりたくないし、まずは交流戦といった所かな。丁度、軍師も2人いるし。紅白戦にしてみるのも面白いかもしねないな。

## 八話（後書き）

お気に入り登録86件  
皆様、ありがとうございます。

## 九話（前書き）

登場人物設定&ステータス（その1）

## 九話

### 九話

あの後、先輩や及川と別れた俺は自室に戻り、ふかふかとまではいかないが自分の寝台で横になっていた。

今日一日だけは政務を行わなくていいように、先輩と健治が分担して終わらせておいてくれたらしい。でも、俺としては明日、現在建業にいる全ての武将と軍師で交流を目的とした模擬戦をやりたいと考えている。

せめて、机の上に載つている書簡は片付けておくかと思い立ち上がった所で、懐からDCPが床に落ちた。俺はそれを無造作に拾い上げ、机の上に置いた。

「そういえば、丁奉つていつていたっけ、あの少年」

俺は脳間に会つた大きな弓を担いだ少年のことを思い出した。先輩が「おもしろいスキル」と言つていた以上、何があるんだろうなと思ひ、俺は椅子に腰掛け机の上に置いたDCPのスイッチをいれた。

画面に映し出されたのは編成パートという文字。

俺は十字キーを押して、仲間の項目を選び映し出される情報に目を通した。

【太史慈軍】

## 【武将・兵士ステータス】

名前：太史慈　字：子義　真名：一刀　資金：136750　670

体力：6000　攻撃力：25000　防御力：20000　移動力：200

兵士最大数4200人　5000人

武器：金色の籠手（攻撃力：5000　防御力：5000　スキル：石破天驚拳）

スキル（自発）

『大号令』LV3：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

『石破天驚拳』LV1：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

スキル（自動）

『指揮』LV3：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防衛』LV3：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃』LV3：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：太史慈隊　兵種：強化兵　動物の顔を模した面をつけている。犬の面をつけた青年がリーダー格と思われる。

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100  
0（1人につき）

### スキル（自動）

『援護防御LV3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇  
『援護攻撃LV3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「山越族のイベント？で結構な資金が溜まっていたんだな。よし、  
今のうちに兵士最大数を増やしておこう。おっ！ギリギリだけど、  
5000人までいけるな。よし、決定つと」

名前：徐盛 字：文響 真名：京一郎 資金：28900

体力：3000 攻撃力：7200 防御力：4600 移動力：  
200

兵士最大数：1500人

武器：凍てついた戦斧（攻撃力：4000 防御力：2000 ス  
キル：碧風衝破）

### スキル（自発）

『挑発LV1』：3ターンの間、前線に武将が常にいる。作戦が特  
攻固定

『碧風衝破』LV3：戦斧を高速で振り回すことによって発生させた冷気を伴った風で敵全体の兵士数を15%減少させる

## スキル（自動）

『指揮』LV3：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御』LV3：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃』LV3：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：除盛隊 兵種：上忍・影組

体力：15 攻撃力：21 移動力：300 コスト：112（1人につき）

## スキル（自発）

『瞬転法陣』LV3：最も近くの自軍部隊の近くへと移動することができる

## スキル（自動）

『隠密行動』LV3：夜間戦闘時、敵に視認されない

『韋馱天』LV3：移動範囲が2倍になる

「白鬚海賊団の時に、俺の前の敵に放った技はこれだな。これもある意味でチートだよな。先輩の部下も、機動力に関してはピカイチだし」

名前：韓当　字：義公　真名：肇　資金：19872

体力：3600　攻撃力：10500　防御力：1530　移動力：  
50

兵士最大数：1000人

武器：加農砲（攻撃力：8000　移動力：-100）

スキル（自発）

『砲撃LV3』：小範囲に固定ダメージ（5000）。対象が建物の場合、威力は3倍となる

スキル（自動）

『兵器改良LV3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城LV3』：建物に対して攻撃時、攻撃力30%上昇

『開発LV3』：兵器開発の為に使用する資金が15%減少

名前：韓当隊　兵種：爆破工作員

体力：6 攻撃力：50 移動力：65 コスト：570（1人に  
つき）

### スキル（自動）

『兵器改良LV3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城LV3』：建物に對して攻撃時、攻撃力30%上昇

「はいはい。及川が言つていた拠点があつたほうが動かしやすいって、そういう意味か。しかし、加農砲とかありなのか？部下も名前が爆破工作員つて、どこのテロリストだよつて」

名前：魯肅 字：子敬 真名：健治 資金：99999999

体力：2500 攻撃力：2000 防御力：1680 移動力：  
100

兵士最大数：1000人

武器：ただの扇（防御力：30）

### スキル（自発）

『流言飛語LV3』：3ターンの間、敵単体部隊の兵数20%減少

『勧誘LV3』：敵部隊の兵力20%減少させ、自軍部隊の兵数20%上昇

## スキル（自動）

『盾装備LV3』：遠距離攻撃によるダメージを60%減少

名前：魯肅隊 兵種：商人

体力：3 攻撃力：2 移動力：200 コスト：10（1人につき）

## スキル（自動）

『商魂LV3』：政務パートにおいて、所持している資金の（兵士数×0.3）%分上昇させる。（最大300%）

「はあっ！？なんだ、これ！？マジでなんなんだ、これ！？資金が1：10：100……つつ！？（啞然）」

名前：陸遜 字：伯珂 真名：？？？

体力：2000 攻撃力：4800 防御力：3200 移動力：140

兵士最大数：1000人

武器：九節混「紫燕」（攻撃力：2000 防御力：2000）

## スキル（自発）

『火計』▼1』・小範囲の部隊へ大ダメージ。

## スキル（自動）

『癒しの風』▼1』・自軍のターン終了時、武将と兵の体力を5%回復する

『軍師』▼2』・スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を35%上昇させる

「俺も真名を聞いたから知つていいけど、ステータス上では知らない扱いか。やはり、そういう関係にならないと教えてはもらえないことがあるうな。同性同士なら問題ないみたいだけど」

名前：丁奉　字：　真名：？？？

体力：2800　攻撃力：5600　防御力：950　移動力：2

35

兵士最大数：500人

武器：大弓「雷鶴荒殻」（攻撃力4000　スキル『流星雨』）

## スキル（自発）

『流星雨』▼1』・空中高く飛び上がり、地上に多数の矢を放つ。

レベルがあがる』ことに攻撃回数増加

### スキル（自動）

『もつたないし〜』：戦場に捨てられた物資を回収し、自分のものとして使用することができる。

『必中し〜』：攻撃が外れない。レベルがあがると攻撃が、鎧や盾を避けて生身に当たるようになる。

「先輩の言う通り、中々お眼にかかるない、もといおもしろいスキルだわ」

名前：厳虎　字：　真名：？？？

体力：1800　攻撃力：2800　防御力：1650　移動力：  
182

最大兵士数：1000人

武器：青色の籠手（攻撃力300）

### スキル（自発）

### スキル（自動）

名前：山越族・若人集

体力 : 14 攻撃力 : 16 移動力 : 125

### スキル（自動）

『援護防御』▼1：近くの自軍部隊の防御力を30%上昇する。

「あるえー？ 厳虎のスキルは？ え、俺好みに開発しちゃつていいの？ ……って、何を考えているんだ」 o r z

なまじ犬耳と尻尾を生やした姿を幻視しているので、そっち方面も嬉々としてやつてくれそうではあるけど…。まあ、今は頭の片隅に追いやつておこう。

名前：厳興 字： 真名：？？？

体力 : 1800 攻撃力 : 2500 防御力 : 1950 移動力 :

182

最大兵士数 : 1000人

武器：赤色の具足（防御力 : 300）

### スキル（自発）

### スキル（自動）

「……厳虎の双子の姉妹つていつっていたよな。武器の攻撃力と防御力を引いたら、まったく同じステータスか。この娘もまた開発していくパターンか。この姉妹つて戦場ではどんな感じで戦うんだろう？サポートし合っているんだつたら…俺がつけている援護系のスキルを持たせたほうがいいよな」

名前：藩臨　字：　真名：瑠璃

体力：5000　攻撃力：12000　防御力：10000　移動力：300

総兵士数：0人

武器：太刀「龍紅爪」（攻撃力6000　防御力5000　スキル：竜吼砲）

スキル（自発）

『竜吼砲』LV3：対象の武将に対して、4000の固定ダメージを与える。

スキル（自動）

『いくさ人』LV2：ターン終了時、自分の隊に兵がいなければ体力を40%回復する。

「は？……なんで、藩臨の真名を俺が知つてることになつているんだ？えつ？まさか、彼女のルートに入るためには一騎打ちで勝つ

「これが最低条件だったとか?……(きよひきよひ)……部屋、掃除しておこつかな」

名前：黄乱　字：　真名・？？？

体力：3000 攻撃力：6500 防御力：3000 移動力：  
100

最大兵士数：5000人

武器：大槌「陽湖畔」（攻撃力：3500 効果：気絶）

スキル（自発）

スキル（自動）

『指揮し Lv2』：部隊に所属する兵士の攻撃力が20%上昇

『喝！ Lv3』：部隊に所属する兵士はどんな必殺の攻撃をくらつても体力を1残して踏ん張ることができる。

「お、これも中々お目にかかるないスキルだな。けど、生き残れても回復する手段がないと……健治に救護隊と衛生兵を作つてもらつか。しかし……この武器なんて呼ぶんだ？ようこはん？ひこはん？……まさか、“ピコハン”じゃないよな」

名前：尤突　字：　真名・？？？

体力 : 2400 攻撃力 : 2500 防御力 : 6000 移動力 :  
236

最大兵士数 : 2000人

武器 : 漆黒の帯 (防御力 : 3000)

スキル (自発)

『捕縛 Lv3』 : 無傷の状態の武将でも無力化し、捕縛することができます。

『摩掛操帶法 Lv3』 : 一騎討ち専用スキル。帯を自由自在に操り、敵を自分の防御力の3倍の力で締め上げる。

スキル (自動)

『女王さま Lv1』 : 攻撃ターンの間、攻撃力が15%上昇する。

「……防御力の3倍って、18000? 何気に強キャラじゃないか。  
問題は一騎打ち専用つてどころか」

名前 : 費桜 字 : 真名 : ? ? ?

体力 : 1300 攻撃力 : 1000 防御力 : 1200 移動力 :

100

最大兵士数：3000人

武器・孔雀の尾（防御力：200）

### スキル（自発）

『伏兵LV3』：部隊に所属する兵士をMAPの好きなところに配置することができる。最大3箇所まで。

『挟撃LV3』：敵部隊と戦闘になつた時、部隊を2つに分けて左右から攻撃することが出来る。

### スキル（自動）

『指揮LV3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『軍師LV3』：スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を50%上昇させる

『幸運LV3』：遠距離攻撃無効

「……費様、すげえ。軍師の中の軍師じゃん！スキルの『伏兵』と『挟撃』の2つと『軍師』のコンボは反則だろ。『指揮』も合わせると80%アップ！？」

先輩たちと新しく仲間に加わった人間のステータスを見終えた俺は、こう思った。

「明日の模擬戦はやめておこう。うん、俺は太守としての政務という大事な仕事があるし、藩臨たちだって建業に引っ越してきたばかりでいきなり戦えって言われても戸惑うだろうし、下手したら先輩たちと溝が深まってしまうかもしれないしな。うん、そうしよう」

俺はそう自分に言い聞かせながら、椅子から立ち上がり部屋の片付けをちよつとして、寝台に横になった。

結局、その夜は誰も訪ねて来ることはなかった。……（泣）

## 九話（後書き）

お気に入り登録323件  
日間ランキングも上位に食い込んでいて感激です  
これからも頑張ります

眼前に広がるのは見通しの良い大平原。

本田はここで、新しく仲間となつた藩臨たち山越の民と交流を目的とした模擬戦が行われることになった。

それも午前と午後の2回。立食形式の昼食を挟むことによつて、さらに交流を深めようといつのが先輩の案だ。

まあ、戦力を均等に分けるということで、昨日全員のステータスを確認していた俺が抱いた最悪の事態が現実のものになつてしまつたのだが…。つまり、俺こと太史慈率いる【太史慈隊】VS【俺たちを除いた太史慈軍】というのが今回の模擬戦の内訳である。

戦場となる大平原を挟んだ向こう側には、本来は味方であるはずの万を超える軍勢が見える。俺たちから見て正面には藩臨と黄乱の旗が見え、右側には敵虎と敵興の姉妹の旗。左側には尤突と悟道の2人の旗が見える。そして、作戦を伝えて廻つているのか費桟の旗が右へ行つたり、左に行つたり、正面でいくらか止まつて、また右へ、みたいなことを繰り返している。ちなみに先輩たちは、本陣に固まつてまだ。

先輩が模擬戦を午前と午後に分けたのは、午前の戦いを反省して、皆で一丸とならないと対抗できないつていう事を藩臨たちに教えるためなのではないか。

それを考えた俺は大きく溜め息をついた。

「つまり、俺たちは全力で闘わないといけないって訳か。べ、別に勝たなくともいいやつて思つていたわけじゃないんだからね」

「　　「　　「　　」　　」　　」

うう、巷で有名なシンデレラを披露してみたが、まったくといっていいほど反応がないのでもの凄く恥ずかしい。

一応、彼らも建業の街で暮らしているため、建業の民との心温まる交流もあって呼び出した当初の頃よりも幾分か感情が表に出るようになってきてはいる。しかし、『ことには未だに反応してくれない。

「はあ、早く始まらないかな」

「太史慈さま。あちらの軍勢に動きが」

そう俺に伝えてきたのは犬の面を被った青年だ。彼の言葉どおり、右側に展開していた厳虎と嚴興の姉妹率いる軍勢が接近しつつあった。

「右翼に伝令。いつも通り、2人1組となつて対処するよ」と

「はっ！」

そつ返事をして右翼へ向かう犬の面の青年。……面倒だ、次から彼のことは『ケン』と呼ぶことにする。

それはともかく、これからどうなるかや、……。

その頃

「たつた5000人。だけど、この建業の地において最強を誇る先輩が率いる、これまた自他共に認める最強の部隊」

「て、敵に回して初めて分かる、この恐ろしさ」

「あんなのが一、街に攻めてきたら、私は民を丸」と連れて逃げますねー」

「ははは。正直者だね、陸遜は」

そう言つて談笑しているのは、僕と後輩で現在は建業の国庫の守人である魯肅、彼もまた後輩で現在は建業の兵たちが身に纏う武具や敵に突破されにくい防壁を作っている韓当、そして新規参入の軍師にして内政にてその敏腕を振るつている陸遜の4人だ。

本当は一刀くんが連れて来た山越族の皆とも一緒に対策を練りたかったのだけれど、藩臨や厳虎たちに『我々は太史慈さまに従うのであって、貴様らと組むのではない』と断言されてしまった。おかげで、僕たちは本陣で待機し、彼女たちが山賊たちを相手して勝ってきた布陣で一刀くんに挑むことになってしまった。予想はしていたけど。

「京一郎さん、正直について彼女たちは勝てると思いますか?」

健治くんがそんなことを尋ねてきた。

「一刀くんの部下である強化兵なんだけど、僕の部下である忍者たちが7～8人で戦つて何とかなるレベルだからね。ゲームの上では圧倒的な数で戦えば勝てたかもしれないけど、この世界に来て一刀くんは彼らに2人1組で戦うように徹底させている。1人が攻撃している間、もう1人は守りに徹するように。おかげで、彼らが負けるのは武将と闘った時のみだ。けど、それも生半可な能力の武将だと囮まれて終りだけね」

「いややー。戦いとうない！勝てるわけ無いやん」

「肇くん、これは山越族の皆と溝を埋める為に必要なことだ。戦わないっていう選択肢はない」

「うわおおおおー？」

「あつ、厳虎ちゃんと厳興ちゃんの姉妹が攻勢に出たようですねー」

「伝令だ。高台にて戦況を“記録”している」「奉にこれから起る」と絶対に見逃すなど

「御意」

「さて、何分持つかなあ」

「うわあ」

健治くん、肇くん、陸遜の頬を引き攣らせる表情が今から起ころうと暗示していた。

俺が率いるのは5000人の強化兵たちだ。

とりあえず、正面に2000人、右翼と左翼に1000人ずつ、本陣に1000人を配置している。その右翼に厳虎・厳興姉妹率いる2000人の軍勢が迫ってきていたのだが、『サクツ』と敗走させた。

『ケン』の話によれば、厳虎・厳興の姉妹は鳶に油揚げを搔つ攫われたような間抜け顔を曝していたようだ。って、なんでその例えを知っているんだと、俺が首を傾げたら、竜の顔を模した面を被った青年が先日持つて行かれらしい。

つて、本当かよ。

で、その姉妹は俺がいる本陣にて石畳の上で正座している。最初は嫌がっていた2人だったが、敗者に文句をいう権利は無いということを伝えると、厳虎は嬉しそうに、厳興は嫌そうに正座した。そして暫くすると：

「師匠へ、足が、足の感覚が。はつ、これも師匠の愛なんですね！ よしひ、どんとこい！」

「ケン。重石を一枚乗せてやれ」

「御意」

「えつ、師匠？ 嘘ですよね、師匠？ しょーつー！ ああ、これはこれでいいかもー」

厳虎の方はこの状態が強くなるための修行の一環だと思って、頬を染め始めていたのでケンに命令して、重石を一枚彼女の膝の上に乗せさせた。この娘は、もう駄目な気がする。

「お姉ちゃんの馬鹿。太史慈さま、ボクはいいです」

「厳興、君らはじうして、他の軍勢と連携することもなく突っ込んだんだ?」

「え。ボクらには必要ないと思ったからですけど」

九三

一  
御意

「あ、あの太史慈さま。それってお姉ちゃんの膝に乗せられたものと同じものでは、や、やめつ。あつー？おモー」

悲鳴と嬌声を上げている2人はこのまま本陣にて、午前の模擬戦が終わるまでお仕置きしておくことにした。

次に動いたのは正面の藩臨と左側に展開していた尤突の部隊だつた。悟道の部隊はぽっかりと空いてしまつた厳虎・嚴興の部隊の穴を埋めるべく動いている。悟道は大人だなー、と思つたりしなかつたり。

もし、どうするかな。

「太史慈さま。尤突さまと悟道さまたちの部隊は我らにお任せトセ

۱۱

確かに藩臨に關しては俺が行かないと拙いか。……そつだ。

「ケン。伏兵には氣をつけろよ」

「は？……御意。部隊の者に徹底させます」

「じゃあ、行つてくるか！」

俺は拳を鳴らして戦場に赴いた。

結論を言おう。

「いやー……ないな。これはない」

田中隊が今回の模擬戦のためだけに作った太史慈隊の本陣にて、敵軍の武将と軍師が全員石畳の上で正座し、膝の上に重石を乗せられて苦しんでいる。一名、悦んでいるのもいるけど。

午前の部の模擬戦はなんなく俺たちの勝利で終わつた。俺が危惧していた費桟も、スキルを使うことなく様々な陣を組んで俺たちを囮もうとしたが、そこは俺の自慢の強化兵。囮まれた瞬間に、囮んだ兵を撃破していた。

藩臨に関してはあの時の一騎打ちと同様、本気で相手をしていたが尤突と悟道、そして黄乱と費桟の部隊を撃破した部下たちが俺と藩臨を取り囮んでいた。状況を把握した藩臨は無駄な抵抗もすることなく、降伏したのだった。

で、本陣に急襲をかけた俺たちを待つていたのは、陸遜の火計と及

川の砲撃。

「ケン！ 韓当と陸遜に重石を追加だ！」

「御意」

「ちよつ、かずひー！？」

「これ以上は無理ですー」

「五月蠅い！あれはマジで死ぬかと思つたわ！」

それをなんとか振り払つた太史慈隊の背後に転移してきた先輩が率いる忍者の徐盛隊。俺が石破天驚拳を使って状況を変えようとする度に狙つたように飛んでくる丁奉の矢。あと一人、俺と対等に戦える武を持つものがいたら、俺は負けていたと断言する。そう、ここに藩臨がいたら俺は負けていたと言つてはいるのだ。

「藩臨、黄乱、尤突、費棧、嚴虎、嚴興、悟道。お前らは何で、徐盛たちと連携せずに戦つたんだ?まさか、俺たちに自分達だけで勝てると思ってたか?ふざけるな!!」

俺の叱咤の声に俯く厳虎、厳興、悟道の3人。藩臨は俺を自分の所に引き付けていたという実績がある為、唇を噛み締めているだけだ。

「尤突と黄乱、何か言いたげだな。聞くぞ」

「太史慈さまが率いる兵があんなに強いといつのは聞いていなかつたわ」

「せうじやな。少々、『鍊度が高い』……程度の情報じやつたからのう」

「ふわわ！？そんな乃愛しゃん、千代しゃまー私が必死に走り回つて手に入れた情報に目を通してくれなかつたんでしゅか！？ひどい、ひどすぎるでしゅう。ふ、ふえええええん」

大きな声を上げて泣く費桟を見て、俺は居た堪れない気持ちになつた。

尤突と黄乱は、冷や汗をだらだらと流しながら、涙を流し続ける費桟を慰めようと声を掛けるが火に油である。彼女達が声を掛けるたびに、今までのことを思い出すのか、泣き声の大きさがどんどん大きくなつていつている。

挙句の果てには……

「今までもそんにや氣がしていましたけど……ぐしゅ……難なく勝ってきたから……ずびっ……気にしないようにしていただけど、みんな私の話なんて聞いていなかつたんでしゅね！もういいです。私はもう、貴女たちの軍師を辞めます！太史慈さまっ！私の真名は天里あまりでしゅ。私の智勇の全てを貴方さまに捧げます。どうか、お役立て下しやい！」

こんな宣言を言つてのけた費桟。その姿は、憑き物が落ちたよつて晴れ晴れとしていた。

## 十一話

### 十一話

#### 【VS太史慈隊】

##### 『勝利条件

- ・ 敵本陣に立てられた旗を奪取する
- ・ 対等に戦えるといふこと、王に示せ！

##### 敗北条件

- ・ 本陣に立てられた旗を奪取される

立食形式の毎食を取り終えた僕たちは田中隊が作った本陣にて軍議を行つてゐる。

僕たちがまず行つたのは、自軍の戦力の分析である。これをちゃんとしない限り、格上の存在である太史慈隊に挑むのは無謀すぎるからだ。

「僕の部隊が得意とするのは機動力を用いた『攻撃と離脱を繰り返す戦法』だ。強さが異常である太史慈隊の兵たちだが、足の早さは人並みであることから、僕の部隊でのこの戦法はかなり有効だと思う。ただ、火力が弱いため数を減らすことは出来ない。囮、もしくは敵を誘導するのに優れていると言つてもいい

午前は聞く耳持たずで、勝手に陣を敷いてしまつていた藩臨や黄乱といった山越の人たちも真剣な面持ちで僕の話を聞いている。

「ワイの部隊は基本的にこいついた野戦には向かへん。ワイラは普段、兵たちが身につける武具を鍛えたり、攻城兵器を作つたりしている職人とそれを扱う専門の兵たちの部隊なんや。午前の模擬戦では、かずびーの部隊がこちらの本陣に仕掛けてくるつていう情報があつたから狙い打つことができたんやけど、さすがに2度目はないやろ。ワイがかずびーやつたら、まずワイラを狙いやるうからな」

「僕の部隊は論外ですねつて。僕自身、文官で戦う力はほとんどありませんし、部下たちだつて筆より重い剣や槍など握つたことはありません。じつやつて戦場で軍議に参加するのだつて、珍しいことなんですつて」

僕の後に、自分の部隊の説明をした肇くんと健治くん。彼らの話を聞き終えた藩臨たちは首を傾げている。

「そのよつな戦力で、じつやつてお館さまを追い詰めたんじや？」

そう尋ねてきたのは、大槌を背負つた黄乱。その後ろでは藩臨が領いている。

僕は陸遜に向かつて目配せした。意図が分かつた陸遜はキャスター付きの黒板（作：韓当隊）を引き摺つて、僕らと藩臨らに見える所に立つた。

「ではではー、午前の模擬戦で使つた作戦を『ご説明させていただきますー。私、太史慈軍の軍師である陸遜と言いますー。よろしくお

願いしますねー」

ペコリと頭を下げた陸遜はにこやかな笑みを浮かべたまま白いチョーク（作・韓当隊）を握り、黒板に書き始めた。

「今回の模擬戦での勝敗を決するのは本陣に立てられた旗を奪取するかされるかでしたー。なので、太史慈さまが率いる部隊がこちらの本陣に近付いてくるのは明白でしたのでー、部隊を細かく分断できるように韓当隊や魯肅隊の人たちに油を撒いてもらつたんですー。こう幾つかの箱を作る感じでー。後は丁奉くんに頼んで火矢を放つてもらいました。でも、これも午後には使えないと思いますー」

火の上がった当初こそ、一刀くんと一緒に驚いていたが時間が経つにつれて火など関係なく進み、後方から襲撃を掛けてきた僕が率いる部隊と戦っていた太史慈隊だ。次に目の前で火の手が上がろうが迷わず、突き進んでくるだろう。

「よつて、午後からの模擬戦では正面から戦うのと同時に、敵本陣に奇襲をかけ旗を奪取する戦法を取りたいと思いますー。言うのは簡単ですけど、実行が難しいのは分かっていますー。それと、山越族の方が好まない戦い方だつていうのもー。けど、現在の私たちが太史慈さまの部隊に勝つ方法はこれしかないんですねー」

陸遜は藩臨たちの表情を窺うように見渡して、

「皆さん之力を貸してくださいー。これは、ここにいる全員の力を使って初めて効をなすことが出来る作戦なんですよ。おねが「……頭は、……下げるといい」ほえ？」

頭を下げるとしていた陸遜の話を遮つて藩臨が立ち上がった。そ

して、勢いよく頭を下げる。その行為を見ていた黄乱や厳虎たちも立ち上がり頭を下げる。

「……午前の模擬戦での敗北、……これは我らの驕りが招いたことだ。……それをこの場を持つて謝罪する。……昂」

「はい、藩臨さま。オレらは師匠のことを噂で知っていた、5万人の海賊を退けたっていう話も。でも、異民族や山賊たちとの戦いが日常茶飯だったオレらは『なんだそんくらいか』みたいな考えだったんだ。費桟さん以外」

「やっぱり彼女は、知っていたんだね。一刀くん率いる太史慈隊の力を」

僕みたいな情報を集められるような部下はいなかつたはずなのに、僕たちの戦力がある程度知っていた彼女は、山越の民でリーダー格である藩臨や黄乱や尤突といった主たるメンバーたちに、太史慈隊の兵一人に対してこちらは5人以上で小隊を組んで対応した方がいいと意見していた。

まあ、結局の所費桟の必死の物言いは効を為す事はなかつた上に、午後からの模擬戦が午前とは比べ物にならないほど厄介なものになつてしまつたのだが……。

「くそう。ワシがあの時、天里の話を詳しく聞いておれば」

「妾だつて、天里と話す機会は沢山ありましたわ。なのに、妾はあの子のいう事を蔑ろにしてしまつた。小さい頃から一緒に育つた、幼馴染だつていうのに……」

手で頭を覆つて嘆く黄乱と、俯き肩を震わせる尤突。それをオロオロと見守る敵虎と敵興姉妹。

そんな暗い空気が漂い始めた中、1人の青年が手を上げて言葉を発した。

「陸遜…殿。その作戦にケチをつける訳ではないが、本陣に奇襲をかけるのは難しいかもしない」

「はいー？」

陸遜が首を傾げる。いや、僕自身も興味があった。彼、悟道の言いように何かを知っていると思ったから。

「費棟さまの采配で最も恐ろしく効果を發揮していたのは、伏兵と挾撃の2つです。こちらの作戦にかかるて、慌てふためく敵をこちらの被害を出さずに処理できたことなど両手では数え切れないほどありました」

「本当なんですかー？」

「私は、太史慈さまに認めてもらうまで、費棟さまの下で部隊を率いていました。だから、あの方の力は理解しているつもりです。ましてや、太史慈さまの下で費棟さまがその力を振るうのかと思つと身体の震えが止まりません」

正直、彼の話を聞かなければよかつたと思った。こちらが有利になる情報かと思えば、まったく逆のことだった。

「完全に無理ゲーやな」

「言つたな、肇くん。始める前から気が滅入つてしまつ」

「うーん。そうなると、じつしましょー。あらひに費棟さんがいる以上、先程のようなこちらが攻勢に出るのをただ待つているというのは無いでしょーし。うー……」

陸遜はそう言って眉を寄せて悩み始める。あーでもない、こーでもない。と、小さな声で独り言を呟くように考えを巡らせる。

「我が軍の軍師さまが考えを纏める間、そちらの部隊が得意とする戦い方を教えてくれないか?」

「……うむ。分かった、徐盛殿」

「僕のことば、徐盛と呼び捨てで構わないよ」

「……承知。千代」

費棟のことで頭を抱えていた黄乱が藩臨の呼び掛けで顔を上げた。

「ワシの部隊か……。すまん、敵を叩き潰すこととかの?」

「あ、オレの部隊もです」

「ボクの部隊も」

「ふざけんな。この脳筋どもめ!ーー

藩臨の視線の気付いた尤突も顔を上げ、

「妾の部隊は……はつ、天里がいないどどいつ動かせばいいのか分からぬー!?」

あふれあふれと辺りを見渡したと思つたり叫んでいた。

「……悟道。……頼みの綱はお前だけ」

藩臨が視線を向けると、悟道は頬を引き攣らせていた。

「えつ、あつ、いや…。壁べりこにはなんとか

「……徐盛。……すまない、我らはこんなものだ

あ、頭が痛い。どうやつて君たちは山賊や異民族に勝つてきたんだ?と問いたい。

……そつか、軍師として費様がいたから勝つっていたのか。山越族特有の正面から叩き潰そうとする正攻法での戦いだけでは、勝てないと思つた彼女が伏兵や挟撃といった作戦を取ることで山越族を護つてきた。

「あえて言わせてもらひづけど、君たち馬鹿だろ」

「……面倒ない」

『シコン』と頃垂れる彼女らの姿を見て、僕もつい米神を押されてしまつた。

「京一郎さん、こつそのこと降伏しませんか?」

健治くんがそんなことを言つてきた。

「魅力的な案だけど、それはできないよ。ここで逃げたら、兵たちが僕たちについてこなくなる可能性がある。なんとしてでも一矢は報いないといけないんだ」

「でも、敵は少数精銳。こちらは数だけが勝つてゐるだけで、鍛度は武将も兵たちも低い。守りに入らないと、午前のように『サクツ』と数を減らされてしまつますって」

「それだー！『がばつ！…』さすが、私の旦那さまー。私が困つている時はちゃんと助けてくれるー。えへへー」

復活した陸遜に抱きつかれ、そのたわわな母性に口と鼻をふさがれた健治くんが手足をばたつかせている。陸遜はそんな彼の状態も関係なしに、『ぎゅぎゅぎゅー』と嬉しさを表現するかのように力いっぱいに抱きしめる。その内、健治くんの手がぱたりと落ちて動かなくなつた。

「篠塚の奴、無茶しやがつて」

「肇くん、やめてあげて。きっと、健治くんは何が起つたのか理解できなかつたはずだから」

「傍から見れば羨ましい状況やけど、実際にはされとうないな。割と本氣で」

男2人、恋人のたわわな母性に包まれたまま昇天した後輩に向かつて敬礼するのだった。

とても幼い顔立ちをした少女に見える女性が、無表情と無反応がデフォの俺の自慢の部下に指示を出して、出して……涙目になつてゐる。命令を聞いてくれるのは嬉しいようだが、反応があそこまでないと逆に恐ろしいようだ。

最初、彼女は「千代さまや乃愛さんに私の力を思い知らせてやるーー！」と躍起になつていた。

が、落ち着いてきた彼女は顔を青くして、「嫌われたかな？乃愛さん、私のこと嫌いになつたかな」とぶつぶつと小さな声で呟いて暗くなつていった。

さすがに模擬戦の開始時刻が近付くと意識を切り替えて、軍師として兵たちに指示を出し、布陣を磐石な物にしていく。その手腕はさすが、としか言いようがない。

「太史慈さま。今回は午前の時とは違ひ攻めの姿勢で行つてもらいましゅ。陣形は魚鱗の型で、太史慈さまには開始直後に、石破天驚拳を右側に見えるあの森に放つてもらいます。私だったら、本隊とは別に敵陣を襲撃し旗を奪取することを目的とした機動力に優れた部隊を作成しますので、恐らくあちらも似たようなことを考えているはずでしゅ」

「いいで深呼吸をして俺をまつすぐな瞳で見上げる費様。

「分かった。その作戦に乗る。他に気をつけることはあるか？」

「はい、勿論です。いくら脳筋の山越の武将いえど、午前の戦いで太史慈しゃまがどれだけ大きな存在であるかということは、もう分かつてているはずでしゅ。徐盛さんや陸遜さんの話を聞いて、太史慈隊の兵士一人に対して数人で対応するということが考えられましゅ。こうなると、その場に長く引き止められることになり、今日一度目の戦いということで疲労が太史慈隊の精度を奪うことがあるかもしれません。これは相手にも言えることでしゅけど」

「「ひからが行つのは短期決戦つてこいつことだな」

「御意でしゅ」

「兵はどうのよつて配置する?」

「正面に3000、右翼と左翼に500ずつ。本陣に500・そして、左側の森に500人、伏兵を配置します。太史慈さまには前線で兵を鼓舞しつつ、本陣を目指してもらいたいのですが」

王が自ら戦場に、それも最前線で戦えつて、これは彼女に試されていふと思つていいのかな。真名を預けられはしたけど、本当に自分が命を賭けてもいい存在なのかを彼女なりに見極めようとしているのかもしれない。

それなら、答えるほかに選択肢は無いだろつ。先輩たちには悪いが、ちょっと本気でやらせてもらひつとこよつた。

「全軍、抜刀！」

俺の突然の命令にも兵たちは乱れることなく応対し、剣や槍をその手に構える。

「これより、我らは仮想敵である味方の軍に攻撃を仕掛ける。名田上は模擬戦だが、お前たちも見たであろう。奴等の午前での戦いぶりを。あれで建業の民を、仲間を、友を、家族を、皆を護れることができるか? 答えは、……否だ! 奴等には覚悟が足りない! 熱さが足りない! 速さが足りない! 何よりも意思を感じられない! 力があるから護れるわけでは無い。力は、意思があつてこそ、本当の価値がある! 奴等に見せ付けろ! 本当の力って奴を! 行くぞ、我が友たちよ!」

「「「「オオオオオオ!」」」

兵たちが上げた雄たけびは、地鳴りのよくな波となり、周囲の木々をも振るわせた。

「はあー、ふわわわ……。わ、わわわ……」

しまった。彼女に耳を塞がせるように言つのを忘れていた。おかげで彼女は俺の大音声の大号令を間近で聞くことになり、目を回してしまっている。

「あー、うん。『ウサギ』、天里と本陣を頼む」

「御意」

「『ケン』は俺と共に來い。『タツ』と『ヨウ』はそれぞれ右翼と左翼の指揮を執れ。それから『ジヤ』、お前は伏兵部隊の指揮を任せむ」

「「「御意、お任せを」」」

「さ、本日2度目の戦いだ。抜かりがないようこいくぞ！」

「「「「応つ……」「」」

「ふわわ～、眼が、眼がまわりましゅ～

### 【備考】

- ・ 太史慈隊の核となるメンバー名を決定しました。
- ・ 十一支で行きます

## 十一話

### 十一話

費棟が指示した通り、俺は開戦直後に『石破天驚拳』を右側にある森に向けて放つた後、兵たちを率いて敵本陣に向かって大平原を駆けていた。

敵本陣の前に布陣しているのは、徐盛の忍者部隊。その後ろには藩臨と黄乱の部隊が展開し、本陣本隊には健治と及川の部隊が展開しているようだ。敵軍の中で旗が見当たらないのは嚴虎、嚴興、尤突、陸遜、悟道、丁奉の6人。

挾撃や伏兵を考えているんだろうが、勢いのついた太史慈隊の突破力を舐めてもらうては困る。

「決して止まるなよ、お前たち。敵本陣を目指して、突き進め！」

「「「応つーーー」」

しばらくすると漆黒の衣を身に纏つた兵たちが俺たちの行く手を塞ぐように立ちはだかる。

その漆黒の部隊を率いるように戦斧を肩に担いだ青年が仁王立ちしていた。

「少しばかり、付き合つもらつよ。一刀くんつーーー！」

「上等だあーーー！」

先輩が振り下ろす戦斧の刃と俺の籠手がぶつかり合い、甲高い金属音を辺りに鳴り響かせた。

「交流を目的とした模擬戦に『大号令』を使うとか、あまりに非常識なんじゃないの？」

「午前の模擬戦は途中で諦めていた兵も多かったですからね。太史慈隊の兵たちよりもそちらの兵たちに喝を入れる意味で言つたんですけど？」

「どうりで、こっちの兵の攻撃力も上がった訳だ。……つづー？ やっぱり僕“だけ”じゃ敵わないな」

「は？ どういって…」

「……助太刀」

「つて、危なつ！？」

先輩の左側から走りこんできた藩臨が剣を突き込んで来た。その速さに瞠目しつつ、籠手で剣先を無理矢理ずらし、攻撃を放つてきた彼女に向かつてカウンターの一撃を見舞いしてやろうとした所で、3人目が現れる。

「邪魔するぞい、お館さま！」

芯のある声と共に俺の身に迫ってきた大槌。両手をクロスして防御することでなんとか耐えることが出来たが、あの威力は半端ではない。

「『めんね、一刀くん。どう考へても、君を一人で相手するのは無理だから。4人で押さえることにしたんだよ』

「徐盛、藩臨、黄乱……あと1人は……丁奉か！？」

俺は身体を右に逸らすことによって、突如前方から飛来してきた矢を避けた。

「太史慈隊も僕の部隊と山越の兵たちの混成部隊で相手しているよ。これで正面から来た君の3000の兵は少しの間だけ動きを止めることができる。あとは時間との勝負さ」

「……我らは、……太史慈さまを倒さなくていい」

「！」にお館さまたちを引きつけられればいいのじゃ

さすがに四対一では分が悪い。並みの相手なら問題ないが、困ったことに目の前にいる3人は兵を率いる立場にいる者ばかり。特に藩臨は一対一の一騎打ちの状態でないと、攻撃を全て受けきれる自信が無い。かといって、藩臨ばかりに気を取られると、先輩と黄乱の動作は遅いが一撃の重さがある攻撃がこの身に迫る。それに加えて、正確無比な丁奉の射撃もあるとなると…。

完全に気を抜くことを許されない状況だ。

「やるねえ。これも陸遜の作戦？」

「そうだよ。1人の若者の命を生贊に捧げた絶対に失敗できない作戦さ」

「は？誰か死んだのか？」

「健治くんがね」

「なんだって！？」

「陸遜のたわわな母性に鼻と口を塞がれて…（ホロリ）」

心配して損した。リア充、氏ね。

「……こういう戦い方もあるってこと」

「確かにワシ一人じゃったら、『お館さまと戦つてこい』と言われても無理だと返すところじやが、こうやって『4人で足止めをしてくれ』ということであれば、話は別じや。どうにかやれる気がするしのう」

藩臨は紅蓮の瞳を輝かせながらクスリと微笑み、黄乱は鮮やかな空色の髪をなびかせてガハハと豪快に笑つてみせる。

「楽しいおしゃべりはここまでだ。行くよ、藩臨、黄乱。援護は任せたよ、『奉！』

「……承知」

「あい分かつた」

「御意です」

目の前の状況を一発で変えることが出来る、スキル『石破天驚拳』

のレベルは1。つまり、一回の戦いで1回しか使用できないということ。開戦直後に放ってしまっているので、今の状態では使用不可。周回プレイで手にしたステータスと、俺自身の経験を元に戦わないといけないということだ。……俺自身の経験？

そうだ、忘れていた。俺は……。

「ケン！俺に2本、剣を寄越せ！」

「ぎょ、御意」

俺は近くで戦っていた部下であるケンに対し、とある命令を下した。それを聞いた彼は今まで戦っていた者たちから距離を取つて、周囲を見渡した後、脱落した兵たちが固まっている場所に向かって駆け出した。

「やばいっ！？丁奉、彼を射抜いて！藩臨と黄乱、一刀くんに剣を持たせたら駄目だ！」

「……どうこうこと？」

「この戦いが終わってから、本人に教えてもらつて…吹き荒れる、氷結の結晶。碧風…衝破つ…！」

先輩が大きく戦斧を振り回し、冷氣を纏う風を生み出し、ケンが走つた方角に向けてスキルを放つた。

戦場でその武を見せ付けていた太史慈隊の面々が先輩のスキルを受け、次々と倒れしていく。その中で膝をついて前のめりに倒れていくケンの後姿が見えた。

「……隙あり」

「ちこつ……」

俺は反射的に飛び退いて藩臨が放つた一撃を避けた。そこに黄乱の大槌での攻撃で追撃を受けそうになつた俺は横に転げて逃げる。

拙い、このままだと。

「……これで我らの『ガバツ』、なにするーー?」

「勝ちじゃ『ガバツ』つて、誰じやー?」

「太史慈さま、我らの剣をお受け取り下せ」「

藩臨と黄乱の身体に抱きついて動きを止めさせたのは、猿の顔を模した面を被る『エン』と猪の顔を模した面を被る『イ』の2人だ。丁度、彼らが立っている所は俺と丁奉の間で、彼は俺を狙い打つことが出来ないでいる。

それに加えて、黄乱の攻撃を横に転がつて避け膝をついたままだった俺の前に、うまく投げて寄越される彼らの武器である剣が2本。俺はそれを利き手は順手で構え、反対側の手は逆手で剣を構えた。

「嘘でしょ。ここぞそれをやる訳ーー?」

「ははっ、先輩。勝負とはいつも非情なん『ひゆるるーー』、アーッン!』だつて、何だ?」

俺はその音を聞いて振り返った。

費棧がいるはずの本陣にて煙があがっている。そして、あるべき所に旗がない。つまり……。

「……我らの勝ち」

「不安じやつたが、昴たちはつまく迫り着いたよつじやな」

部下の2人に拘束されたまま、安堵の溜め息をつく2人を見た後、俺は先輩の顔を見た。

『にしし……』、と悪戯が成功した子供のように笑う先輩を見て、俺は天を仰ぐ。

「あー…。やられた」

「えー。まさか、開戦直後に太史慈さまの『石破天驚拳』が悟道さんや尤突さんが潜んでいた森に直撃するとは考えていなかつたんですけどー、逆に攻撃された森は安全なんだろうなと思つてですねー。厳虎ちゃんや厳興ちゃんに指示を出して、悟道さんや尤突さんの屍を見て見ぬ振りしてもらひ形で太史慈隊の本陣に奇襲を掛けたんですー」

黒板に今回の動きを書いて説明する陸遜に、涙目で俺を見上げてくれる費棧。

「つう、考えていたことが裏目に出てしまいました。やつぱり、両方の森に兵を配置しておくべきでした。太史慈さま、申し訳ありま

せん。私が至らないばっかりに…ぐすつ」

「こや、これは交流を目的とした模擬戦なんだからそこまで気にする必要はないって」

「IJの敗北を前に、より一層の精進をしてまいりましゅ

費様はやう言つて涙を思いつきつその瞳に溜めたまま駆け出し、尤突の胸にダイブした。

「天里、『めんね。妾が悪かったわ。貴女の話をちゃんと聞いていれば』『んな』ことにはならなかつたのに」

「乃愛ちゃん。私のことを嫌いになつていなんですか？」

「当たり前じゃない。妾と貴女の関係はどんなことがあっても途切れたりなんかしない！」

「乃愛ちゃん…」

「天里！」

一瞬にして百合の花が咲き誇つた。

唖然とした顔で2人を眺めていた俺の肩を『ポン』と優しく叩いたのは黄乱だった。

「あやつらめ、どிでもあんな感じじや。昔から、男は眼中に無かつたから、お館さまも気にすることはないと思つぞ。身体が昂ぶつてたまらんといつなら、ワシが夜伽に行って発散させてやろうつか？」

まあ、ワシみたいな行き遅れでよくならじやが

「是非」

「……お、お館さまも好きものじやのつ。……今日は汗と砂に塗れているので次の機会にことにつきじよつではないか。ではのう」  
そういうてそそくさと去つていく黄乱の後姿を見ながら俺はがつくりと頃垂れた。

今のはじめに描かたのだ?

がつつき過ぎたのか?

あそこではもつと大人の余裕を見せんべきだったのか?

くつやおおおおー千載一遇のチャンスを逃してしまつた。

「かずひー。そんなもんやで、この世の中」

「ははは。まだまだ、チャンスはあるよ

及川と先輩が側に来て、俺に向かつて優しく微笑んだ。

くつ、今は優しくされるほうが、精神的にダメージが大きい。

こうなつたら、心の中で念じよつ。

『俺の孫策、カモーン!!』

長沙

「 ん?今、誰かに呼ばれた気がしたよつな……」

## 十三話

### 十三話

最近武官として身体を動かすよりも、太守として机と寝台を行つたり来たりする生活が続いていたので、身体が鈍ってきたと感じた俺は休暇を取らせてもらおうと先輩の部屋を訪ねた。そして、

「いい加減に休みをくれ！」

と机を『ドンッ』と叩いて先輩に物申したら

「体調管理も仕事の内なんだけどね……」

と呆れられた。

が、しかし俺の目の前で椅子に座つたまま難しい表情をしている先輩の目の中にはしつかりと濃い隈ができている。彼もまた十分な休みをとれていなければだ。

「先輩は何やつてんですか？」

「それは僕として？それとも徐盛として？」

「どちらもです」

「……太守なら、徐盛として活動している僕の動向は知つていて貰いたかったなあ」

そう言いながら先輩は俺に向かって書簡を投げて寄越してきた。

『土地のやせ細りの改善について』や『田畠、水田の拡張による農産物の収穫増加の見通しについて』と題して、色々な政策や意見が書き込まれている。

「『めん、そつちは僕のプライベート用だつた

プライベート…なのか、これ？次に投げて寄越された書簡には

『揚州全域で確認される若い娘の失踪事件と賊による人身売買との関係性について』と題して、各地で勃発している失踪事件の被害者である女の子たちの詳細なデータと、人身売買を取り扱っている賊たちが拠点としている皆の位置が記された地図、そしてその人身売買にて実際に女の子を購入したと思われる豪族の詳細なデータが記されていて、

「『めん。そつちは現在、部下に調べさせている極秘資料だつた  
「しつかりと読ませてから訂正するの、やめてくれませんか！』

「『めんじめん』

そういうつて渡された書簡には、『収穫された魚介類の長期保存方法と流通について』と書かれていた。俺は資料を流し読みした後、先輩に返しこう言ひ。

「先輩、俺はこつちよりもそつちの方が気になるんですけど

「あー、やつぱり？」

先輩の話によると、俺が太守となり交番と警備兵を街に配置するまで、この建業の地でも失踪事件は起きていたらしい。この建業の街では警備兵たちが街の至る所を巡回するようになつた為、悪さをするものは少なくなつていて、たまに酒に酔つた奴とか、周囲の人間を巻き込んで喧嘩する馬鹿が出たりするが、すぐに鎮静化されるようになつたと街の民からも感謝の言葉が上がつてきている。

「揚州全域が一刀くんの領地と言つても過言では無い以上、この問題は早期に片付けないと拙いんだ。一応、呉や会稽の街にも交番と警備兵を置くようにしているので、あちらでも被害は少なくなつてきているようだけど、じついうのは本元を片付けないといつまでも続いてしまう」

「それで、今は人身売買に関わっている賊と豪族の絞込み作業の真っ只中つてことですか」

「そういうこと。豪族の連中は人を囮つていている場合が多いから、中々情報が得られない。まだ、賊たちを拷問に掛けて吐かせる方が、気が楽だよ。……おかげで最近徹夜が多いんだ」

そう言つて先輩は『ふあ…』と大きな欠伸をした。目尻から涙が一筋零れ落ちる。

「お疲れ様です」

俺は机の上に置いてあつた手拭いを手渡して労いの言葉をかけた。

「ありがと。でも、先日ようやく奴等の尻尾を掴んだ。今度、一斉摘発する予定なんだ。それで、物は相談なんだけど」

「賊の方の討伐は俺が指揮してもいいですか？」

「助かるよ。恐らく、豪族たちも知らぬ存ぜぬを貫いて、武力的に抵抗してくると思うから戦力は多いに越したことはないんだ。とりあえず、戦力として黄乱の部隊と悟道の部隊は連れて行きたいと思っていたんだけど、そうなると賊の方は抑えられなくなる。片方を押さえると、もう片方は逃げてしまうからね。一気に片付けたいと思つていたんだ」

「決行はいつですか？」

「3日後だよ。丁度、その日がある豪族に女の子たちが引き渡される日もあるんだ」

聞いているだけでむかついてくる話だな。女の子たちの身体と心、そして未来を弄んだ罪、必ず償つてもらひやせー。

太史慈隊の中でも精銳と呼べる存在である12人の部下と先輩の部下である忍者部隊を100人連れて、俺は件の賊を仕留める為に山に潜んでいた。事前に知り得た情報では、賊の人数は50人にも満たないということだつたが、なんだこの人数は？1つの国の軍隊と同等の規模に膨れ上がっていたのだ。

何が起こったのかを俺が腕を組んで考えていると漆黒の衣にその身に纏い、鼻の上まで覆面で隠し、右目を黒色の眼帯で隠した銀髪の男が報告してきた。

「恐らく、太史慈さまの善政と強固な太史慈軍によつて、狩場を失つた山賊や江賊が勢ぞろいしているものと思われます」

「眞みのある話に群がつたハイエナどもの集まりつて訳か」

「は？ ハイエナですか？」

「すまん、こつちの話だ」

ちなみにハイエナつていうのは、ネコ目ハイエナ科に属する動物の総称で、長い鼻面と長い足を持ち、イヌによく似た姿をしている。アフリカのサハラ砂漠や、トルコ、アラビア半島などに分布する。少なくとも中国にはいなかつたはず。

「太史慈さま、あそこに天幕が張られているのが分かりますか？」

嘴のついた面を被つた赤髪の少女が指差すのは木々の間。その指先を追つて見るも見えるのは木々ばかりで天幕などどこにも見えない。

「いや、ビームだよ？」

「あそこですつてば」

そう言つて彼女はふんふんと怒り出しそうな勢いだが、本当に何も見えない。

「チョウ、主も我らもお前のように田はよくないので」

チョウと呼ばれた少女をケンが優しく嗜める。

「うー、でもでも。あの天幕に私よりも小さな女の子たちが連れ込まれたんですよ」

「全軍抜刀！徐盛隊は木々と闇に紛れるよつて隠れ、山賊と江賊を片つ端から殺せ。太史慈隊は俺と共に来い！チョウ、道案内は任せる」

「はーい」

その天幕は周囲に立ち並ぶものと比べても一際大きかった。中で馬でも乗り回せそうなほど広さがある。

「誰だ、て『ザシユツ』」

「……と、俺の背後で地面に何かが落ちる音がした。顔だけ動かして後ろを見ると、首の無くなつた賊の身体から噴水のように噴出す血をその身に浴びているケンが、何事も無かつたかのように振舞いつつ、俺につき従うようにそこにいる。その後、次々と返り血を浴びて真っ赤になつた鎧や武器を持った部下たちが現れる。

「……行くぞ」

「……御意」

中に連れて行かれたという娘たちを救わねばならない。俺はそんな思いを胸に抱いて、天幕の中に足を踏み入れたのだが、そんな思いは一瞬にして消え去ることとなる。

「…………」

中にいたのは不精髪を生やし、不衛生な服を身に纏つた10人くらいの男たちと、姉妹らしき少女たちだった。その少女たちはどちらも10歳そこらだらう。

片方の少女の首筋には賊の1人が脅すように剣を突きつけていた。あまりの恐怖に泣き叫ぶ事も出来ずに、目を見開きがたがたと身体を震わせている。

一方、もう片方の少女は半裸だった。かるうじて身を隠している残りの服を、自ら震える手で取り去るうとしているではないか。

「下衆が……」

後ろの方で『タツ』がドスの効いた声で呟く。

俺は一步前に出て、少女たちの痴態に目が釘付けになつていていたに向かつて言い放つた。

「いい、『ご身分だな。お前ら』

突然の来訪者に呆気取られた賊たちだが、俺たちが血の滴る武器を身につけていることを知ると慌てて自分達の武器を探して慌てふためく。その隙をついてチョウが少女の首筋に剣を突きつけていた男の首を一刀で刎ね飛ばした。

床に転がっていた自分の武器を手にした男の手を、天幕の上の部分に届きそうな程大柄な体格を持つタツが踏み抜いた。『グシヤツ』という音と共に、地面に血が広がっていく。その男は青褪めた表情

でタツを見上げていたが、それも長く続かなかつた。タツは男の手を踏み抜いた足ではない反対側の足を男の顔に乗せ、一気に体重をかけた。『ゴキリッ』という音が天幕の中に響き渡り、首があらぬ方向を向いて絶命する死体が一体出来上がつた。

「何者だ！ てめえら……！」

賊の頭らしき男がいきり吼えるも何の迫力も無い。

「建業が太守、名は太史慈。用件は言わなくとも分かるな」  
俺の名前を聞いて「やはりか」みたいな表情を浮かべる人間が数人見られた。

「ふざけんなー！」を何処だと思つてやがるー！」は俺が築き上げたアジト、『ここには一千の部下たちが』

「なら、なんでアジトのど真ん中にいるこの天幕に俺たちが居ると思つ？」

「そんなの……決まつて……。まさか……？」

賊の頭は現在自分が置かれている状況を理解したのか、頬を引き攣らせて俺から離れるように後退していく。賊の頭の身体が天幕を作つている柱にぶつかると同時に、俺はこの場に居る全員の心胆に寒気を覚えさせるような冷たい声で告げた。

「皆殺しにしてきたに決まつているだろ？ 将来ある娘たちの未来を奪つたんだ、自分達の未来を奪われる覚悟くらい、……あるよな？」

今まで殺して来た賊の血で濡れてしまつた金色の箒手を賊の頭に向かつて突き出すと、天幕にいた男たちは悲鳴を上げて我先にと天幕の外に向かつて駆け出した。そして、月明かりが照らす中、天幕の外に待機していた徐盛隊の面々に切り裂かれて死んでいく影が見えた。天幕の外に逃げた最後の1人の首が宙を舞つて、地面に落ちるのを見届けた俺は賊の方を見て呟いた。

「あとはお前だけだな」

「ぐ、来るなあああー！」

賊の頭は体中の穴という穴から色んな液を出しながら、俺に向かつて武器を向けてくる。曰の焦点は定まらず、手をガクガク震わせているため、近付くのはある意味で危険である。だが、俺は敢えて近付き賊の頭が振り回す剣をその手で掴み上げ、叩き折った。

折れた剣を見て、顔色を能面のように白くしていつていた賊の頭は地面に額を擦り付けるように土下座し俺に許しを請つてきた。曰く、「生きるために仕方が無かった」や「最初は労働役に男も狙つていたが、豪族が買い手になると年場もいかない少女たちを要求してきた」や「どうせ、親は子供がいなくなつても次の子供を産めばいい」と変な解釈をした言い訳を聞いた瞬間、俺の堪忍袋の尾が切れた。

俺は賊の頭の身体を蹴り飛ばし、手足の甲を踏み碎いた。醜く泣き叫ぶ賊の頭の顎を片手で掴んで俺の顔の高さまで持ち上げ柱に思い切り打ち付けた。白い泡をぶくぶく吐き出して白目を剥いて気絶した賊の頭を見ながら俺は告げた。

「手前の言い分を聞くのはもう懲り懲りだ。生きていることが苦痛で、心から死にたいと思えるようになるまで、簡単に死ねると思うなよ。『ジャ』、ありとあらゆる拷問にコイツをかけろ。情報を吐かせるだけ吐かしたら、どんな風に扱つても構わん」

「シシシ。御意」

俺に『ジャ』と呼ばれた青年は蛇の顔を模した面の下で、舌なめずりをして了承し、賊の頭の足首を握り天幕の外に連れ出していった。静かになつた天幕の中で、俺はある一点を見て溜め息をついた。

「とにかく、アリマジナ！」

「はい、なんでしょう?」

「助け出したのなら、さつさと天幕の外に連れてってやれよ。と思つたのは俺だけじゃないんだが？」

見れば、ケンもタツもエンもイも、『うんうん』と頷いている。

「いやー、主のあの冷徹な言葉を聞いた瞬間に身体の芯が熱くなっちゃって、連れ出すのを忘れちゃいました。てへつ

「へつ じやねえだろ！ 一部始終を見届けて、完全に意識を消失しているじゃないか。完全にトラウマものだぞー！」

「えっ、虎つておいしいんですか？」

「なんで、そんな話になつたああああああー!?」

俺の叫び声が住んでいた人間を無くし蛇の殻となつた賊のアジトに響き渡るのだつた。

「で、なんでその時に連れ帰つた少女たちが、かずぴーの部屋で暮らすことになつたん？普通なら、会つた瞬間に逃げ出したくなるくらい怖い思いをしたんとちやうん？」

「……のはずなんだけどな。理由を聞いても教えてくれないんだよ」

「一応、部下を使って彼女たちの親を搜索しているけど、もうじばらぐ時間が掛かりそうなんだ」

今回的人身売買の件に関して報告書を作成している先輩の部屋で、俺たちはそんなことを話していた。及川の言つ通り、少女たちを建業に連れ帰つてきた翌朝、2人の少女が俺の執務室を訪れ侍女として雇つてくれと言つて來たのである。

年齢を聞けば今年で9歳になる少女たちを働かせるのもなあと思つた俺は、俺専属のお世話係に任命した。お世話係といつても、俺が寝るために使つてゐる部屋の掃除と、寝坊しがちな俺を起こすことくらいが仕事で、残りの時間は自由にしていいと告げてある。どうせ、先輩が彼女たちの親を見つけるまでの繫ぎだし。

「それで、そのめんこい少女たちの名前はなんていうん？」

「ん、確か。……大喬と小喬って言つたかな？」

「ははは。将来、きっと美人に育つよな。今のつり元手籠めにしておけば?」

「俺は、口には愛であるものであって、手を出すものじゃなこと思ってます」

「紳士やなー、かずぴーは」

「 「 「 ははははは」 」 」

十四話（前書き）

【拠点フェイズ】

## 十四話

『姉妹と散歩』『及川、行きます！』

俺の部屋に少女が好む可愛い小物がどんどん増えていく。例えば、服、化粧品、装飾品、ぬいぐるみなど。

それはまだ部屋の片隅に置かれているだけだが、それが部屋いっぱいになるまでそう時間は掛からないだろう。

何故、こんなことになった。

……いや、俺が彼女たちにお世話係になるように命じたからなんだ  
けどや。

どうして、それが俺と一緒に寝食を共にするようになってしまったのか？

大喬と小喬の姉妹にそれとなく聞いてみたら、こんな言葉を返された。

「「え、お父さんみたいだから」」

OK…、俺つてそんなに老けて見えるのか。

それとも枯れていよいよ見えてるのか。

どちらにしてもイメージチェンジせねばなるまい！

そうして、休暇を貰つた俺はラフな格好で建業の街をぶらついていた。ただし、両手に小さな華状態で。

どこで洩れたのかイマイチ分からぬが、俺が出かけようと扉を開けたらしつかりと外行き様に着替えた姉妹が立っていた。そして、何も言わずに俺の両側に立ち、それぞれ俺の右手と左手を取つて繋ぎ2人揃つて「早く、行こつ」と言ってくる始末。期待するような眼差しを向けてくる2人の視線に負けた俺は、そのまま街へ向かつた。

街の大通りは大勢の人で賑わつてゐる。俺たちが建業の街にきて初めて行ったのが、この大通りの改修だつた。道幅を広げて人通りを楽にして、道路の脇には店を作つた。経済の流れをよくするために税収がある一定額まで引き下げた後、他国の商人をこの建業の地に呼び込み、店を開く者には一定額で土地を貸し与えて街を賑わせるように仕向けて了。

ただし、俺はそこまで関与していない。商人の呼び込みや土地の賃貸に関してはすべて健治に丸投げしていたし、彼自身そういうことをするのにやりがいを感じていた。適材適所つていう言葉もあるし、皆が笑顔なのだからあまり気にすることは無いだろう。

「太史慈さま、あの毛がふさふさした白い猫のぬいぐるみが欲しいです」

「私は、あのキリツとした姿で座つている黒い猫のぬいぐるみが欲しいっ！」

はいはい。分かっていたよ。

どうせ、やうこひのが目的でついてきていたつてことくらいこはむわ。

そつ思こつとも、俺は懐から財布を出して店主に値段を聞いている。

いこち、太守として働いている以上、貰つものは貰つても使い道が無くて埃を被つているだけなんだかい。

彼女たちの笑顔の種になるんだつたら、いくらでも買つてやるや。

「あ、… ありがとうございます」

と、白いぬいぐるみを抱きかかえたままそっぽを向いた小喬。しかし、彼女の横顔は茹鈴のように首まで真っ赤になっている。

「べ、別に嬉しくなんかないんだからね

と、黒いぬいぐるみを抱きかかえたままそっぽを向いた大喬。しかし、彼女の横顔は茹鈴のように首まで真っ赤になっている。

その後2人を連れて建業の北区画にやってきた。

ここりへんは鍛冶屋や道具屋、薬屋などの専門職の人間が住み、己の腕を日々磨いている場所もある。勿論、兵器開発を行って

いる及川たちもこの北区画内に工房があり、日夜開発を行っている。

俺はその及川の工房を田指して歩いているのだが、大喬と小喬はこの北区画独特の雰囲気にのまれてしまい、うつすら涙を溜めて俺にしがみ付いている。その姿を見た立派な髭を蓄えた厳つい鍛冶職人や、白衣を着て眼がねを光させていた研究者らしき男たちはがつくりと肩を落としていた。誰だって、こんな可愛い女の子たちが自分達を見て怯えていたらやはりショックを受ける。

「ん？ かずぴー やないか。こんな所でなにしとるん？」

「お、韓当。丁度よかつた。お前を探していたんだよ」

「かずぴーがワイを？……ああ、武器のことや。一応、かずぴーの希望に合わせて作ってみたけど、イマイチやな」

「やつぱり、刀は難しいか？」

「せやな。ワイ自身が刀の精製方法を知らんから、どうにもならへん。試行錯誤を繰り返して、徐々に形にしていく段階やねん。暫くの間は、双剣で我慢してくれや」

そう言って及川は歩き始めた。俺たちは彼の後を追つて歩いていく。5分ほど他愛ないおしゃべりをしながら歩いていると、前方に大きな建物が見えてきた。

「あれがワイらの工房やねん。見た田どおり、中はめっちゃ広くてな、開発した兵器の威力試験等もできるんや。ただ、天井には限りがあつてな。ははは」

「何やつたんだ？」

「かずぴーは石弓って知つとるか？弓つていつも個人が1人で運用するもんとちやうて、……そつやな簡単にいうと投石機みたいなもんや。投石機っていうても使う弾は手槍くらいの大きさの矢なんやけど。で、その石弓をな、上向きに縦七列・横七列を並べ、それぞれ微妙な角度で外側に向ける。そうするとな、矢は中心から放射状に広がるように放たれるつちゅう寸法やねん。まあ、ワイラも何でこんなものを作ったんやろつて、天井に刺さった49本の矢を見ながら思つたわけやけども」

「遊びはほどほどにしとけよ」

「ちやんとやることはやつてているんやからええやん」

「まあ、な」

俺たちは及川たちの工房に足を踏み入れた。中は割りと綺麗に整理されていて、俺がイメージしていた工房とは打つて変わつての姿に俺は『ほつ…』と感嘆の声を洩らした。だが、

「かずぴー。ワイラの工房にいい印象を持つてくれたんわ、嬉しいんやけど。残念ながら、男ばつかの工房なんてすぐに物が溢れて、足の踏み場も無いほどじちやじちやになるのは当然やねん」

「……なんで今日に限つて、綺麗に片付いているんだよ？」

「先輩の方から人材派遣されてきた女の子たちが綺麗好きだつだけや。ワイラに向かつて、『臭い、風呂に入つて来い！』といつて

工房から追い出して、ニヤワイらが戻つてきたら正にビフォーアフター やねん

先輩の方から人材派遣…ね。恐らく先日の人身売買の時に保護した女の子たちだろう。家族が見つかった女の子たちは順次、故郷へ送つてあるが未だに家族が見つからない者や家族が死んでしまつている女の子には、保護した先輩が責任を持つて仕事を斡旋している。病院でのスタッフや、学校での教師役というか子供たちのお守り役。及川たちのような職人たちのお手伝いさんや城での侍女とか斡旋される仕事は様々だ。稀に兵役に就きたいという者がいるけど、先輩はまず斡旋した仕事をやって、やりがいを感じなかつたらその選択をしても構わないと言つているらしい。

「で、この工房に派遣されてきた女の中で、ひときわ異彩を放つ奴がおんねん。名前は確か、歩シツつていうてたかな。江東の地の人間にしては珍しい、ミステリアスなクールビューティーでお姉さん系の人なんやけど」

「お前の好みの、ど真ん中ストライクだろ」

「さすが親友…ようわかつとるやないか…！」

目をキラキラさせて、俺に詰め寄つてきた及川を無理矢理引き剥がして話の続きを促す。

「孫吳には、ワイ好みのヒロインはおらんかつたから諦めていたんやけど、ここにきてワイの好みを地で行く女性が現れたんや。これはもう、ワイに彼女を落とせつていう神さまからの啓示やろ…！」

鼻息を荒くして豪語する及川にちょっと引き気味な俺と、話しに全

くつこていけない大喬と小喬の姉妹。

「そこ」で、かずぴーに相談なんやけど。クールビューティーなお姉さんを口説くにはどんなことに気をつけねばええと思つ?」

「は? なんで俺に聞くんだよ」

「親友のかずぴーやからや」

「……。前にお前の部屋に置いてあつた本で見た気がするけど……、確か『ありのままを受け入れる姿勢』が大切じゃなかつたか? クールビューティー系だと、一回は人から「変わつてる」って言われたことがあるはずだから、「それでもいいんじやない」っていう態度で接することで安心感を与える……みたいな?」

「ありがとー! かずぴー! 早速、行つて来るわ! …」

そつと風になつた及川。少しすると戻つてきて、

「かずぴーに頼まれていたもんやけど、68番倉庫に置いてあるから後はよろしくー! ではつ! …」

今度こそ、工房の何処かに消えていった及川の背を見ながら思つた。

「68番倉庫つて、……どじだよ」

及川が言つていた68番倉庫には、俺が頼んでいた剣の他にも“いろいろ”なものが置いてあつた。

どんなものがあつたか、ヒントをあげるとすれば入った瞬間に大喬と小喬の2人が可愛らしく『ヒツ』と身体を震わせて俺に抱き付いてきたということだ。まあ、俺もビビツタし。

これで68番“武器”倉庫となつていたら、その名の通り剣や槍、弓や斧といった武器だけになつていて、名前がただの倉庫となつていていたために、なにかとにかくの木乃伊とか、何時の時代かの土器とか、西洋の騎士甲冑や日本の戦国時代に使われていたような鎧等、置かれているものに統一性は無い。

「なんなんですか、ヒツッ？」

「ひゃ！？何がこっち見てるし…？」

俺は安心させるように2人の頭を撫でてあげる。2人は目を瞑つて、恥ずかしそうになすがままにされていたが、『ほにゃー』と顔を崩していくすぐつたそうに身を捩つた。そして、その柔らかくて小さな身体を俺に密着させてくる。

表面上は2人を安心させるように微笑んでいるが、頭の中で2つの魔法の呪文を同時に思い浮かべ必死に唱えていた。

『心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。』

『口リは愛であるもの、口リは愛であるもの、口リは愛であるもの、口リは愛であるもの、口リは愛であるもの。』

俺は目当ての双剣を手早く探し出し、2人を連れて工房を後にした。

その帰り際、頬に紅葉を咲かせた及川を見かけたがとりあえずスルーすることにした。どうせ、後日相談に来るに決まっている。あいつは元の世界で合コンとかに参加して女友達はいっぱいいたが、彼女とは尽快く長続きしなかった上に、ナンパ成功率は一桁台だった。

頬の紅葉は、その歩しつつていう人にやられたんだろうな……、と俺は苦笑いしつつ城へと歩みを進めるのだった。

両手に小さな華を連れて……。

## 十五話

### 十五話

「先輩、ちょっと相談したいことがあるんですけど、今大丈夫ですかって？」

そう言って申し訳なさそうに俺の執務室に入ってきたのは健治だった。その手には多くの書簡が…… o r n

「あ、これは先輩に僕がやるのとしていることを理解してもらひたために用意した資料ですって」

俺が俯いたことによつて慌てた健治が即座にフォローする。

「健治が俺に相談つて、一体なんだ？」

「いや、吳や会稽の商人らと交易をすることになつたのでその報告と、江賊についてちょっと」

「健治としては陸路ではなく、海路とつか河路をつかつて交易をしたいのだが、江賊に狙われるから嫌だと先方から言われたつていう所か」

「その通りですつて。船に関しては及川先輩に頼んでいますから、先輩にはその商会の船を護衛する部隊を派遣してもらいたいんですつて」

「難しいな。藩臨や厳虎といった山越の人間は船に対して耐性がな

い。たぶん、酔つて戦力にならないだろう。かといって太史慈隊を切り崩すつていうのもな。ここはいつそのこと水軍を立ち上げるのはどうだらうか

「先輩が主動してくれるのであれば、商会の人間としては大いに資金を出すことが出来ますつて」

水軍の設立か。自分で切り出しどいてなんだが、仕事がまた増えた

「おひ、かずぴー。ちょっと、ええか？」

大喬と小喬の2人に淹れて貰つたお茶を飲みながら休憩していた俺の所に及川がやってきた。俺はお茶を一口含んで飲み干した後、及川に話しかける。

「午前中に魯肅が来て、交易に使う船の建造を任せたつて言つていたが？」

「それなら田中隊に造船所を今、作つてもらつてあるわ。その後に、ワイら兵器開発部隊が造船するんや。つて、ワイがここに来たんわ、ちやう理由やねん。実はな、最近ワイらの工房に忍び込んで開発した兵器を盗み見ていく輩がおんねん。今はまだええけど、これからのことを考えるとな」

及川はそつこつて腕を組んだ。

「確かに。警備兵の強化と情報管理の徹底、他国のスパイを排除

できる人間の育成つて所か。警備兵に関しては俺がどうにかすると  
して、情報と忍に関しては徐盛を頼らないと」

「僕がどうかした？」

邪気の無い声が響いた。見れば執務室の扉を開けて、蒼い鎧を身に纏つた先輩がにこやかな笑みを浮かべて入ってきた。

大喬と小喬の2人は恭しく頭を垂れ、先輩はそんな2人の頭を優しく撫でた後、俺たちの所で歩を進めてきた。大喬と小喬の姉妹は執務室から出て行く。それを見送った先輩はおもむろに切り出した。

「ごめんね、一刀くん。休憩中に」

「いえ、構いませんよ」

「それじゃあ、報告させてもらひうよ。先日の失踪事件と人身売買に関わっていた人間の肅正が完了したことと、解放した女の子たちの故郷への帰還と仕事の斡旋が完了したこと。それに伴い兵役に就きたいっていう女の子たちもいてね、それぞれ武官と文官として雇用することとなつた。これはその資料だよ、確認しておいて」

差し出された書簡を俺は一瞥した。

先輩から差し出された書簡には、史実において名を残した武将や軍師の名前がちらほら…って。

「甘寧って、ゲームとか演義とかで有名な鈴の甘寧ですか？むしろ、『禁・三国恋姫』の孫吳ルートのヒロインが何故！？」

「まあ、アレだよ。僕らが介入したことによつて、弱小江賊の一人だつた彼女が仲間に売られて危うく豪族の手に渡りそうだったつてこと。おかげで男に対して嫌悪意識が芽生えちゃつてゐるのか、話をするのが大変でした」

先輩はそつとやれやれと首を振つた。

「孫県ルートの甘寧といえば、徹底的にクールキャラを通す女の子やろ。それに加えて男性に嫌悪感つて…」

及川が頬を引き攣らせて話す。その考えに關しては俺も同意する。

「どうあえず、彼女には一刀くんの下で働いてもらひよつとしてあるから」

「ちょっと待てえええ！？いや、待つてくださいいい！何故、俺の下なんですか！彼女の戦闘スタイルなら、先輩の下でいくらか学んでつていうのが筋でしょ！！」

「そうかもしけないけど、僕はこれから犯罪や汚職をおこなつた人間らを調べ上げて処罰しないといけないし、各部署に情報管理を徹底させるように促すマニュアルを作成しないといけなくなつたし」

「ワイらは今まで通り、太史慈軍の武装と商人らが乗る交易船と護衛する部隊が乗る軍船を造船せにやならんし、もとより戦えんし。適材なのはかずびーをおいて、他におらへんやん」

「本當か」

俺は書簡に書かれていた甘寧の名前を見て、大きな溜め息をついた。優秀な人材を手に入れたことによる安堵の溜め息ではない、孫吳の復活を遠のけてしまったという罪悪感からくる溜め息である。

「一刀くん。そんなに悩むようだつたら、最初から孫吳軍が弱体化しないように援助すればいいんじゃない？同盟か不可侵条約を結んで、劉表軍との戦いの時に物資を送るとか援護部隊を派遣するとかさ」

「それも、そうですね。そういう方向で準備をしていきましょう。及川、健治にもそついた顔で動くように話ををしておいてくれ」

「うん、そのくらいやつたるわ」

「じゃあ、僕は次の仕事があるから後はよろしくね」

そういうて2人は俺の執務室から出て行く。

残された俺は先輩から渡された書簡をもう一度ゆっくりじっくり眺める。

「甘寧の名前が載つっていたことにもびびつたけど、さあこれに載つていちゃいけない名前があつたような……」

バラバラと俺は書簡を捲り書かれている名前を一人ずつ確認していく。

「つづー？……これは拙いつて。えーと何々斡旋された仕事先は……」

「小料理屋『春菊』？」

俺が首を傾げていると控えめに扉をノックする音があり、俺は入る許可を出した。するとすぐに犬の面をつけた青年が入ってくる。

「ただいま戻りました、太史慈さま」

「ご苦労、ケン。首尾は上々のようだな。つと、そうだ。小料理屋の『春菊』という店を知っているか？」

「チョウが普段、働いている店ですか？」

ケンの口から出てきた言葉を聞いて俺の頭の中に、一刀を振り回してキャベツや人参といった野菜を細切れにしている彼女の姿が思い浮かんだ。

「太史慈さまが、今思い浮かべたようなことを披露して客集めに貢献しているようです。チョウは黙つていれば、可愛い奴ですから、徐盛さまに紹介されて新しく来た『子義』という娘と共に2枚看板として小料理屋を盛り上げています」

「……。ありがとう、ケン。俺が知りたかったことが全部分かったよ」

「はあ……？？？」

首を傾げるケンを余所に、俺は早急に話をつけなければならぬと思つた。

俺はその夜、大喬と小喬の2人が寝静まつたのを確認し、城から抜

け出した。

本当ならこんなことをする必要はないのだが、“名前を奪つてしまつた者”としてどうにかしなければならないと思つたのだ。その後、ケンに店の場所を聞き、地図に認めて置いたので小料理屋『春菊』まで迷わずに行くことが出来るだろう。しかし、どうすればいい。

「いつこの場合の責任の取り方ってどうすればいいんだ？」

何故、俺は作成したキャラクターに『太史慈』という名前をつけてしまつたのか。大人しく自分の名前をつけていれば、こんなことにはならなかつたであろう。

「今更、悔やんだ所で何も変わらないか。とりあえず、本人に会おう」

責任の取り方も本人の意思を確認してからでも遅くは無いだらうしな。

小料理屋『春菊』、建業に東区画に店を構えている。『安くて、うまくて、いっぱい食べれる』と評判は上々。店主は一角という粋なおっさんで店員には給仕として若い女の子を雇つてゐる。昼時になると仕事や訓練の間に訪れる人夫や兵たちが長蛇の列を作るくらいに流行り、夜になると雰囲気が一転して家族連れ多く来店する。そして、さらに夜が更けると居酒屋にジョブチエンジする、朝から晩まで開いている数少ない店だ。勿論、リピーターも多い。

何が言いたいかといふと俺が『春菊』についての段階でも飲んでいる客が大勢いたのだ。中には知った顔がちらほらと…。

「おお、主さまも食事か？チョウ、酒を持って来い！」

店先で豪快に酒を飲んでいた大きな体躯の青年が俺を手招きする。

「はいはい。ただいま。後で覚えてるよ」

店の中で慌ただしく注文をとっていた小柄な赤い髪の少女は営業スマイルを浮かべながら、間違つても客に言つてはいけない言葉を吐いた。俺は手招きした青年の所へ向かった。すると、そこにはすでに酔いつぶれた部下が数人寝抜けていた。

「主さまもこの店はよく来るのか？」

「いや、今日が初めてだよ。タツはよく来るのか？」

「その通りだ。私は昼飯と晩飯はここでお世話になつている。ここほど、飯を超特盛りでついてくれるところはないからな、がぶがぶ」ジョッキとも呼べる杯に注がれていた酒をまるで水のように飲み干して行く彼の姿に俺は苦笑いを浮かべる。

「…シシシ。主も来られていたのですか」

病的までに肌が白く、線の細い青年が話しかけてきた。

「ジャも一緒だつたか」

「…シシシ。私とタツはほとんど一緒に行動していますからね。彼の側にいれば、実験材料が大量に手に入りますから、シシシ」

そういうつてジヤは酒をちびちびと舐める様に飲んでいく。

「はい、白洒をピッチャーでお持ちしましたー、てへつ  
料金は、貴方の首をお願いします」

そう言つたチョウは二刀を取り出して、ピッチャーを手に取つたタツに斬りかかるうとしたが、店の中から連續で飛んできた矢で二刀を地面に落としてしまつた。

ただでさえ小柄な体格のチョウが握る二刀を狙つて矢を放つとは、中々の腕前。俺は関心して、『ほう』と感嘆の息を洩らした。

「チヨウさん！ 今日で何度目ですか！！ お密せまは神さまだつてい  
われていいでしょつ！！！」

「うう…私は悪く無いもん」

「駄田ですよーちゃん」と謝つて下さい」

トーナメント

「私は気にしない。それよりも酒追加」

殴らせていいよね、答えは聞いてないつ。

チョウはそう言ってタツに飛び掛つた。タツはそんな彼女の様子を気にすることなく、机の上に置かれている料理を次々と食べていく。

「やう.. やはれたら」

「すまない。先ほどの矢は君が放ったのか？」

俺は彼女が持つ『』に田をやりながら話しかける。

「へ？……ああ！？す、すみません。食事をされている所に、怪我とか『』ませんか？」

「いや、ないよ。それに丁度よかつた。この店に『子義』っていう人いるよね。ちょっと連れてきてもうらえないかな？」

「子義は私ですけど、貴方ははどうですか？」

俺はその女性をまじまじと見る。超サラサラの銀色の髪、切れ長でエメラルドを思わせる翠色の瞳、脚はモデルのようになスラリとしていて、母性はまあ俺好みとでも言つておこうか。

「俺はこの建業で太守をしている“太史慈”だ。少し話がしたいのだが、この後抜けることは出来るかい？」

「はあ……たぶん」

そうこうして店主の所へ向かう彼女の後ろ姿を見ながら、本格的にどうじょりゅうか頭を悩ませるのだった。

## 十六話

### 十六話

俺の部屋にて大喬と小喬の姉妹が荷物の整理を行つてゐる。彼女たちの荷物は俺が買い与えたものがほとんどであり、そのひとつひとつを眺めていたらなんだかおセンチな気分になつてきた。これが愛娘を嫁にやる父親の気持ちなのか。

「太史慈さま、これが永遠の別れじゃなんですから」

「むしろ、今度は母さまと一緒に遊びに来るね」

そつゝ人が荷物を纏めている理由、それは彼女たちの親が見つかつたことに他ならない。

会稽の街の太守を務めている父親の喬公とその街で水軍を率いる母親の喬玄、この2人が大喬と小喬姉妹の両親だつた。普通であれば太守なんて役職に就いているのだから真っ先に分かりそうなものだが、俺や先輩も『吳の二喬』と呼ばれる予定の大喬と小喬は知つても彼女たちの親は知らなかつたのである。そして、彼女たちの両親も面子の為か、愛娘たちが失踪したつていうことは極力伏せていたのだ。先輩の部下が屋敷に忍び込んで、大喬と小喬の真名を呴きながら、涙を流し続ける母親の喬玄の姿を見ていなければ分からず仕舞いであつただろう。

「喬公さんと喬玄さんは直しく言つといってくれ」

「はい。お父さまやお母さまに、太史慈さまが私たちによくしてくれ

れたことは必ず伝えます

「ふん。父さまにしては珍しくいい判断だったって言つてあげる予定なの」

2人はいつかの散歩の時に買つて上げた白猫と黒猫のぬいぐるみをそれぞれ右手で抱き、左手には衣服や化粧品などを詰め込んだバッグを持つて俺の前に立つ。そして姉妹揃つて頭を下げる。

「今まありがとうございました。この恩は決して忘れません」

「

「うん。2人とも元氣でな。今度は我慢なんてしないで、お父さんやお母さんに精一杯甘えるんだぞ」

「はい。えへへ」

2人と短いながらも、これまでのことを話した俺は笑顔で彼女たちを送り出した。

彼女たちの故郷である会稽の街には警備兵の強化と情報収集の為に先輩と商会の交易の関係上で健治も行くことになつてゐる。彼女たちの身の安全は保障されているも同然だ。

「それじゃあ、一刀くん。僕たちも行くね」

「先輩、僕は県と会稽の街を廻つた後に、山越の方にも行きますので建業に帰つてくるのはかなり遅くなると思いますつて。それで穩をお願いしようと思つたんですけど…」

「ついて行くつて聞かないんだろ？いいよ、問題ない。軍師は費棧がいるし、文官もぼちぼち育つてきている。長めの新婚旅行だと思って羽を伸ばして來い。そして、モゲロ」

「先輩、最後のがなれば尊敬して終わつたのにして…！」

「ははは、冗談だよ」

「改めて、行つて参ります。太史慈さま」

俺は恭しく頭を垂れる先輩や健治たちに向かつて頷く。それを確認した兵団たちが先頭から歩みを進めていく。

荷台の上に乗つてゐる大喬と小喬の姉妹が俺に向かつて手を振つていた為、俺は大きく手を振り返した。

俺は彼女たちの未来が明るくてより良きものになることを心の底から願うのだった。

先輩や健治たちが会稽に向かつて発つた数日後、俺は藩臨や黄乱たち武将を集めて合同訓練を行つていた。今まで俺の仕事の関係上、書面でしか指示を出してこれなかつたがこれからは違つ。新しい政策なんかは一日に一件くればいい方だろうし、ある程度の制度も完全に民の間に認識されてしまつてゐる。

「というわけで、武将組は俺が直々に相手をしよう。兵たちは太史慈隊の者の戦い方を見て学び、自分達の鍛錬に活かす様に。では解散！」

俺の掛け声で山越族の若人衆たちと警備兵たちはケンたちの下に行き、彼らの鍛錬の様子を見学している。俺の周りには藩臨や黄乱、厳虎や厳興といった山越の将たちの他に先日太史慈隊に加わった人員もいる。俺はその中から甘寧と彼女を呼ぶ。

「最初に紹介しておく、新しく我が軍に入ることになつた甘興霸と俺の“妹”である太史享だ。甘興霸には今度新設することになつた水軍の將に、太史享には『兵の部隊を率いてもらひことになる。丁奉、君も太史享と共に』兵の部隊を率いてもらひことになる。部隊運用については黄乱や尤突、費棧から学んでおくよ!」

「「「はつ」「」」

「では、始めようか。まずは、誰から来るのかな?」

俺は眸を見渡しながら呟くのだった。

その後暫く、眸と身体を動かした後

「お館さま。稽古をつけてもらつておいてなんなのじやが、本当に同じ人間なのかのう」

「黄乱こそ、その大槌をあんなに素早く振り回して攻撃に転じられることは凄いことだと思つた」

「いや、その大槌の攻撃を片手で止められてしまつておるので何も言えんのじやが」

俺は黄乱と話しながらも現在組み手を行つてゐる厳虎と厳興姉妹の

動きを見ていた。

巖虎は言つなれば、ボクシングや拳闘といった素早い攻撃と手数で攻める戦闘スタイルだ。

対して、巖興はムエタイやキックボクシング、テコンドーといった重い一撃とリーチの長さで攻める戦闘スタイルだ。

2人とも鍛えればいい武将に育つことは間違ひが無い。

久しぶりだが、『禁・三国志姫』のユニット強化について説明しよう。俺は懐からDCPを取り出した。

そうそう、言い忘れていたがこのDCPはこの世界の人間には見えないらしい。これを操作している間、俺は腕を組んで何かを考えているように見えるようだ。この前、ケンに確認を取ったし。

では、改めて説明するとしよう。

- ・ まず強化したいユニットを選ぶ
- ・ アイテムの中から『攻撃力上昇の書・初段』や『防御力上昇の書・中段』といったものを選び、そのユニットに使用する
- ・ すると、使ったアイテムの効果でユニットが強化される
- ・ 問題があるとすれば、この能力上昇のアイテムが中々手に入らないことだ。一回の戦争で1個手に入れればいい方というもの……なのだが、周回プレイをしている人間はちょっと事情が違う

- ・自分自身のキャラクターは資金で強化できるが、生み出したユニットや仲間にしたユニットはこの方法でしか強化できないのが悩みつつ、周回プレイには連れて行けないので実はこの能力上昇のアイテムは結構持っていたりするのだ

- ・それでは早速やってみようか

俺は画面上で厳虎を選び、アイテムの『攻撃力上昇の書・中段』（攻撃力 + 500）を使った。するとその効果がすぐに現れる。

『バキッ』

厳虎が放った右拳は防御している厳興の身体を後方に殴り飛ばした。

「あやあつ！？」

「銀河！？えつ、なんで！？って、痛いっ。体中が痛いっ！？」

今の今まで拮抗していたのに、いきなり攻撃力が上がつて面食らつていた厳虎だったが、突如自分の身体に起きた事態に理解できずに地面の上でぐるぐると転がりまわる。

『名前：厳虎　字：　真名：？？？

体力：1800 攻撃力：3300 防御力：1650 移動力：  
182』

中段で、こんなにもダメージがいくのか。「ごめんよ、厳虎」と心中で俺は謝罪した。

でも、このまま姉である厳虎だけ上げておくのもなんだし、厳興に

も使っておいた。ほむつとな。

「んにゃあああ！？痛いつ！？急に全身の筋肉があああ！？」

地面の上で転げまわる姉妹を心配してか、周りでそれぞれ鍛錬をしていた皆が集まり出した。俺はその光景を見ながら

「…………」

これは滅多なことないかぎり、使わないほうが良さそうだと想うのだった。

## 十七話

### 十七話

健治こと魯肅が建てた学校のおかげで、ある程度仕事のできる人材が集まり始めた。

仕事を分業化し、現代の会社や役所のような効率化を図ることによって、俺の仕事も何%か減り睡眠時間も確保できるようになってしまった。これから、どんどんそういった人材は増えていく予定なので、つらいのは今のところだけだと希望を持ちながら仕事をしている。

だが、そんな俺を嘲笑うかのようにトラブルはいつも突然やってくる。

「！」報告します

片付けても減らない文字通り山の如く積まれた書簡を神速の「！」とき勢いで処理していると、困った表情を浮かべたケンが執務室の扉を開けて俺の元に駆け込んできた。

「どうしたんだ？お前がそんな顔をするなんて、珍しいじゃないか」

「はっ、申し訳ありません。少々、困った事態になりました、私たちではどうしようもできないのです」

「手短に頼む。午後から新しく開拓する区画の改案についての会議があるんだ」

俺は視線を落とし書簡を見る。午後に予定が詰まっている以上、せめて机の上に乗っている分は終わらせててしまいたい。だが、ケンから発せられた言葉に、俺は右手を持っていた太守の印鑑を床に落としてしまう。

「はっ。長沙の太守である孫文台さまが小料理屋『春菊』にて立て籠もつておられます」

「…………。は？」

俺は顔を上げて、ケンの顔を凝視する。ここで彼が「冗談ですよ」と言つてくれたらよかつたのだが、現在の彼にそんなユーモアはない。彼は至極真面目な顔で説明を開始した。

「朝早くに来店された孫文台さまはそこで酒を二斗程飲まれた所で一度就寝。その後、起きられたところで食事を取られ、『あー、おいしかった。お腹いっぱい。じゃあ、こここの太守さま呼んでー。私はお金持つて無いんだー』だそうです」

「ははは。江東の虎とあろう者が無銭飲食か、笑えるじゃないか。  
……牢屋にぶち込め」

「戦争になります」

「冗談だとケンには言つたものの、先ほどの太史慈さまの眼は『本気』でしたと返された。

くそう、午後からの会議は延期してもらわないといけないじゃないか。

今から調整するとなると…嗚呼…むかつくなあ、おいつ…！

建業の東区画にある小料理屋『春菊』の周りにはちょっととした人ばかりが出来ていた。野次馬もいれば、困った顔をした警備兵の姿もある。あからさまに面倒くさそうな表情を浮かべた太史慈隊の連中もいる。

俺が来たことに気付いた民たちが道を開けた。俺はそこを通って、店の中に入る。

店内を見渡すと客は一人しかいなかつた。いつもであれば満員御礼で外には長蛇の列がデフォであるこの店にとつては、完全に異常事態である。俺はたつた一人しかいない客に目を向けた。

長い薄桃色の髪、切れ長の瞳。褐色の肌に赤色の衣を身に纏つている。正面を覆う布地は、首の後ろで結んだ紐によつて引っ掛けられており、そのために背中の部分は肌も露となつていて。江東の虎と呼ばれる武人のものとは思えないほど細い肩も露出しているために妙に艶かしい。

「貴女が孫文台…か？」

「ええ、そうよ。うん、合格 そんな所に立つていないで、隣に座つて」

「合格…つて、何? そんなことを思い浮かべながらも、俺は彼女の隣の席に座つた。

カウンター越しに店主である一角さんを見れば、顔はにこやかに笑つてゐるが腰から下がガクガクと震えている。厨房の方から視線を感じたため、そちらをみると給仕の女の子たちが『家政婦は見たつ！…』と言わんばかりに俺たちの様子を凝視している。

「あー、店主。とりあえず、隣の彼女が食つて飲んだ分は俺が払うから」

「い、いえいえいえいえいえ。滅相もございません、太守さま。我々がこうやって、安心して店を開いていらっしゃるのも太守さまや兵の皆さんのおかげです。お代は結構ですよ」

「やついう訳にはいかない。店に入った以上、店主の前にいるのは太守ではなく客だ。客が食べて飲んだ分を店主が御代として請求するるのは当然のことだ」

俺は懐から財布を出して、給仕の女の子たちの中にいたチョウを呼んで持つていかせた。しばらくすると厨房の中から阿鼻叫喚の悲鳴があがつたが、俺は気にしない。

「それじゃ、お構いなく。お酒追「却下だ」加……ええーーー？どうしてえーーー！」

「人の金で酒を飲むな。ついでにいふと、何で此処なんだよ

「別にいいじゃないのよー。せつかく、娘や臣下たちの口を欺いてここに着たんだもん。どうせなら街で一番評判がいいお店でおいしいものが食べたいじゃない？」

そう言つて本当に嬉しそうに笑う彼女の姿に毒氣を抜かれた俺は、

溜め息をひとつこいた。そして、心の中で諦めた。

「店主、」この店で一番高い酒を開けてくれ

「おお」

「へ？ は、はい！ ただいま」

店主が駆け足で厨房の中に入つていぐ姿を見送り、俺は隣に座つて、彼女を見ながら呟く。

「午後からの政務を全部サボるんだ。それでも惜しくなかつたって思えるくらい、酌をしてくれよ」

「貴方みたいな人は初めてよ。いいわ、一生忘れられないくらい、いい思いをさせて、あ・げ・る」

そう言つて彼女は俺に腕を絡ませてきた。先ほども思つたが、名だたる武人とは思えないほど、柔らかい肢体に俺の一部が暴走しそうになる。彼女の息遣いを感じ、互いの体温が服を越えて伝わり、その心臓の鼓動も肌を通して伝わる。

「ふふふ。心臓がもの凄く早く鼓動してる。もしかして、じつじつと初めて？」

「……黙秘する」

「可愛いわね。からかうのはここまでにしておこうかしら。もしかしたら、娘を貰つてもらわないといけなくなるかもしねいしね」

そう言つて彼女は絡ませていた腕を解き、元の位置に戻つた。そして、真剣な面持ちで俺を見つめてきた。

「貴方はこの街を、いえ…。この広大な揚州の地をどうじょうと思つていてるの？」

「どうしよう…か。俺はただ領土内を豊かにして、この地に住む民たちが賊や食餉という恐怖に怯えることなく、ただ平穏に笑顔を絶やさずに生きていける、そんな地にしていきたいと思つていい。今はその下準備に追われている段階だけどな」

「もし、それを脅かそうとする敵が現れたら？」

「決まつていい。全力で排除するのみだ。相手がどんなに強大であろうとも、それが戦う事の出来る者、護ることが出切る者の義務だろ」

俺は笑つて答える。すると彼女も『ふふふ』と笑みを零した。

「あーあー、これで貴方が私利私欲に塗れた男だったら、民を解放するつていう大義名分で攻めることができたのにー。これで手を出したら私たちが悪者じゃない」

「ははは、残念だったな」

「いいわ。別の方法をとるから」

そつと彼女はすっと立ち上がり店の出入り口に向かつて歩みを進める。

「ありがと、貴方と話せてよかつたわ。一緒に飲むのはまた次の機会にしましょう」

「ん、そうか?」

彼女が手を振つてきた為、俺も振り返そつと手を上げたところで

「じゃあ、またね。ふふっ、童貞の太守さま」

と、言われた。

『プチッ』俺の頭の中で何かが切れる音

俺は素早くDCPを操作して俺自身に金色の籠手を装備する。すると、先ほどまで装備していなかつた金色の籠手が俺の両腕に具現化する。それを見ていた太史慈隊の連中が顔を真つ青にして慌てる姿が目に映つたが、俺はそんなことは関係なく力を溜める。

「ん、何?」

そう言つて振り向いた彼女に向かつて俺は全力全壊の拳を放つた。

「石破天驚!ゴッドフインガー!!」

「なつ、ちよつ!/?嘘でしょ『ガシッ!-!』」

石破天驚拳の氣弾が金色に輝く巨大な掌となり驚愕して動けなかつた彼女の身体を包み込んだ。指の間からなんとか顔を出した彼女は俺や周囲にいる人間に對して助けを求めようとしたが、それよりも早く

「ヒートエンド・…！」

「誰か助け『ドドーン…』」

俺のスキルが発動した。

『ぼてつ』という音と共に道端に倒れる孫文台。しかし、先ほどまでの姿とは完全に違う。爆発の影響で身に着けていた紅い衣は弾け飛び、生まれたままの姿を晒してるのである。

普通であれば美女の裸に誰かが食らいつきそうなものだが、店の前に集まっていた野次馬たちは俺が店から出てきた瞬間一斉に逃げ出した。警備兵も太史慈隊の人間も皆、例外なく。

原因は分かつている。……俺だ。

なんせ野次馬の中にいた子どもが俺を指差して

「あんなの僕たちが好きな太守さまじゃないやー！」

と言つて泣きながら逃げていったからな。

「た、太史慈さま。……」ぐつ。この方はどうしましようか？

いつの間にか俺の右斜め後ろに控えていたケンが恐る恐る声を掛けってきた。

「外套を被せて、俺の部屋に放り込んでおけ。くくく、あんなことを言つた責任は取つてもらおうか。くくく、くはーはははははー！」

はーはっはっはー！ げほげほっ

「……御意」

### 新スキル会得

- ・ スキル（自発）『石破天驚ゴッドファインガーレベル1』：石破天驚拳の派生技。対象の武将1人に対して、6000の固定ダメージを与える。装備破壊効果あり。

## 十八話（前書き）

あれ？ なんでこんなことに？

## 十八話

### 十八話

「昨晩はオタノシミでしたね」

自分の部屋を出てすぐ、信頼を寄せた部下から放された言葉に放心する俺。

昨日、長沙の太守であり、江東の虎と呼ばれる孫文台が建業を訪れ、ある小料理屋にて会談を設ける形になった。だが、別れ際に彼女が放つた言葉に俺は短絡的にキしてしまった。今はちゃんと反省している。

俺が咄嗟に放つた攻撃で気絶してしまった彼女をそのまま放置するわけにもいきず、俺はケンに俺の部屋に運ぶように命令した。この時、来客用の部屋に連れて行つていればと思わなかつたわけではない。だが、言つてしまつたのは自分の部屋だった。

よつて、質素な寝巻きに身を包んだ美女を横目に、俺が掛け布団一枚を羽織つて椅子に寝る羽田になつたのは、自業自得というしかない。

手を出さなかつたのかつて？

この人は娘がいるつて言つていた。誰が、旦那がいる女性に手を出さか！そこまで落ちつぶれていなゐわ――

「と、太史慈さまが出てこられたら言つようと、韓当さまが……」

及川……、今度会った時、真剣でシメる。それとケン、それは忘れていい知識だ。いいか、絶対に忘れるよ。分かつたな、絶対だぞ！

いつも通り食事を済ませた俺は、執務室に向かい硬い椅子に座った。そして、筆と判子の確認を行う。俺が『ふう…』と息を吐くと同時に、書簡を山ほど抱えた侍女を連れて、我が軍の2大軍師の1人である費桟がやってきた。

「おはようござこましゅ、太史慈さま」

「ああ、おはよう。いつもすまないな」

こんな会話をしている横で侍女たちが俺の机の上にどんどん書簡を積み上げていく。文官をあれだけ配置して、仕事を分業化しているのにも関わらず、この量の書簡があるとか太守の仕事マジで大変だわ。

「すみません。私たちの中でまとめて書簡整理が出来るのは私だけなので」

「いや、藩臨や黄乱たちには太史慈軍の兵士全体の鍛錬や部隊運用で世話になっている。政務に関してはこれから少しづつ出来るようになつていってもらえればいい。少なくとも、俺がこうやって一生懸命、太守の仕事を全うしているのにそれを肴に酒を飲んでいる“そこ”の人のようにならなければ！」

「そこの人？……ふわわわ！？どなたでしゅか、この人は！？気配

がありましたんでしたよ

酒瓶を片手に満面の笑みを浮かべつつ、費棟に向かつて手を振る長沙の太守。

俺も何度か長沙に送り返そうとしたのだが、『こっちの方が料理美味しい』『こっちのお酒うまー』『海の魚料理』、お刺身、焼き魚、煮魚、サイコー』と言つて聞かず、拳句の果てには『私も建業に住むわー!』って豪語する始末。

もう面倒くさくなつて、長沙の文官に宛てて書を認めた。もうしばらくしたら引取りに来てくれるだろ?」

費棟が予想外の人物の登場に慌てながら退室した後、執務室に残つたのは俺と机の上に積まれた書簡の山と、酒瓶を全部飲み干した長沙の太守・孫文台だけであつた。

「いい子よね、あの費棟つて娘。私の所とは大違いや

「気になる言い方だな。貴女には後継者である孫伯符と、断金の誓いを交わした周公謹といった優秀な人員がいると聞いているが?」

「……あの2人が交わした断金の誓いを、何故貴方が知つているのか気になるけど、今は置いておくわね。まあ、あれよ。私の所では現在とある議論が交わされているの」

孫文台は俺の前まで歩いて近寄つてくる。

「『揚州の大半を治めるに至つた太史慈軍をどうするか』ってこと。これ以上の勢力になる前に攻め入ろうと考えてゐる過激派と、少し

様子を見て十一分に肥えた所で掠め取ろうと考へてゐる保守派の一  
手に分かれて議論してゐたわ」

「どちらもいひ方に攻め入ることには変わりないんだな」

「毎日、毎日、あいつらの要望を耳に入れる私の身になつて考えて  
よ。最初、あいつら口を揃えて何て言つたと思つ?『我らが祖父の  
代から継いできたあの地を穢す、あの不届き者たちを殺しに行きま  
しょう』って言つてきたのよ。私はその時、貴方のことを知らなく  
て『はあ?』って聞き返してしまつたわ。そしたら出るわ出るわ

金で太守の地位を買つて、連れ込んだ兵を街に住ませて元々いた住  
民を追い出し、税を引き上げて住民の生活をどん底に追い込み、税  
を払えなくなつたら若い娘を売りに出させ、溜め込んだ金で豪遊を  
してるとか……って、微妙に合つてゐる所もあるんだけど。

「私は聞き流していたから問題なかつたんだけど、娘2人が彼らの  
言つ事を鵜呑みにしちやつてね。寝ても覚めて、『揚州の地を穢  
す暴漢・太史慈を討つぞー!』っていう感じなのよ。そんな所で真  
面目に太守の仕事をしているのが馬鹿馬鹿しくなつちやつて、自分  
の眼で確認しようと思つて建業に来た訳」

そう言つて彼女は俺の机に腰掛けた。

「そしたら貴方が治める街や村には警備兵という常駐の兵たちがい  
て住民を護つていて、街と村を繋ぐ街道はしっかりと整備されてい  
て、商人たちが街や村を行き来して適正な価格で食料を売つたり買  
つたりするから民が飢えることもなく、私が建業に着くまでに立ち  
寄つた街や村の民は皆笑顔だつたわ。そして、日々に言つていた。  
『私たちの太守が太史慈さまになつて良かつた』ってね。貴方がど

んなにいい太守かは、じに滞在している間に色々と見せてもらつたからね

「…………（汗）」

俺は彼女の話を聞いていて冷や汗を流しまくっていた。拙い、非常に拙い。

そういう危険な感じになつてているところに、『そちらの太守である孫文台を迎えてくれ』っていう書状を送つてしまつたのか？情報を探して、この人に伝えていた奴等の耳に入つたら、こつちを攻めに入る口実になりかねない。

「ん？ 私、かなり貴方のことを褒めているんだけど」

反応をしない俺を心配して、彼女がこちらに顔を向けてくる。

「ちょっと、顔色が悪いわよ！ ？」

「拙い、戦争になるかもしね。ケン、非常事態宣言だー。武官、文官をすべて謁見の間に集めろ」

「は？ ケンって、あの青年の…って、うわあー？ 何処から来たの！？」

「御意」

俺が呼べば何処にだつて現れる太史慈隊のリーダーのケン。たぶん、空間から空間へ移動する術を持っているに違いない。彼は俺の命令を聞いた後、素早い足取りで執務室から去つていった。

「よりによって先輩のいないこの時期にか。くつ…。ないもの強請りは出来ないか。建業の護りは韓当に任せるとしかない」

後のことばは謁見の間で各自の意見を聞いて決めていかないと…。といつか、なんでこんなことになってしまったんだよ。

謁見の間に集められた武官や文官たちは、青天の霹靂の非常事態宣言に何が起きたのかと議論を交わしている。藩臨や黄乱といった面々は目を瞑り、俺が来るのを待っているようだ。

俺は自分のDCUAを懐から出して画面を見た。すると『これはWarrning』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、今回の敵の情報が浮かび上がってきた。

### 【暴走する孫堅軍】 兵士総数 6万

我が領地をものにしてようと迫る狂気に満ちた孫文台が鍛えた将兵が率いる軍団

兵を率いるのは江東の小霸王『孫伯符』

「母をまの仇、必ず殺すわ。覚悟しなさい、太史慈っ！…」

『戦いますか？戦いませんか？』

- ・ 戦うなら戦争パートに移ります。

- ・ 戦わないなら、国レベル・資金・住民感情が激減します
- ・ 桜<sup>さくら</sup>だ。  
死のう<sup>う</sup>。

## 十九話（前書き）

書きなおすかもしません。

## 十九話

「突然だが、俺は今から太史慈隊の全員を率いて、孫堅軍と共に江水を中心に活動している江賊団を討伐してくる。その間、君たちにはこの建業の地を護つて欲しい」

謁見の間に集められていた武官や文官たちは、俺が告げた言葉を自分の中できつかりと反復した後、目を白黒させて驚愕の声を上げた。特に韓当は。

「ちょい待てえ！！一刃！おま、何を言つているか分かつんのか！」

と、韓当は唇をわななかせ、壇上に一足飛びであがり玉座に腰掛けていた俺の襟首を引っ掴んだ。

彼のその行為に普段の韓当を知る者は皆が自分の目を疑つたであろう。いつも飄々としていて、片想いの女性を口説きに行つては頬に紅葉を咲かせる軟派な男。兵器開発部という職人たちを一手に率いる、見るからに戦う体付きをしていない彼が凄い剣幕で自分たちが仕える王に掴み掛かっているのだから。

「江賊団如きに俺たちは遅れを取ることはない。それに、孫堅軍も一緒だ」

「うやうやしく、今回の敵は江賊やない

俺と同じ世界の出身でDCPを持つのことだ、現在の状況は俺と同じくらくなっているはず。

「近隣の街や村の人たちは、建業へ避難をせる。場合によつては田中隊を派遣することになるかもしだい」

「ワイの田を見て言え、一刀!! ワイは親友であるお前を死なせたくない! ……今は太史慈軍、全員で当たるんや」

血の気が失せるほどに歯を噛み締め、一瞬のためらいのあとに韓当は提案した。韓当の提案を聞いた費棟や黃乱たちが眉を顰めた。彼女らは太史慈隊の強さを嫌といつほど知つてゐる為、今の韓当の発言は聞き流せなかつたようだ。

「駄目だ。そんなことが出来るほど、まだこの国は完成していない。隙を見せれば、あつといつ間に崩壊するような脆く弱い存在なんだ。一応、徐盛には至急建業に戻るように文を出した。直に戻るだろ?」

「崩壊したつて、何度だつてやり直せるやろ?」

「今、この地に生きている人たちの命や笑顔は、一度失えば一度と取り戻せない」

俺は皆に聞こえるように言つた後、韓当だけに聞こえるように音量を絞つて話しかけた。

「……及川、許してくれよ。俺の頭じゃ、これが限界なんだよ。全軍同士の戦いになつてしまつては駄目なんだ」

「相手は6万。太史慈隊は5000。いくら、かずぴーが強いからつて無謀すぎるやろ。相手は、今まで戦つてきた相手とは違つて、鍛え上げられた兵士と、それを束ねる将軍と軍師たちや。そんじょ

そこの豪族だつたら、ワイだつてこんな剣幕にはならへん。でも相手は江東の虎率いる孫堅軍や。なんで暴走しとるのか知らんけど

「そこら辺はしつかり考えてあるよ。大丈夫だ。俺は必ず戻つてくれる、だから信用しろ」

「……帰つてきたらそのすかした面、一発殴る。絶対や」

そう言つと韓当は俺の襟首から手を離して背を向けた。そして頭を搔きながら階段を一段ずつ降りていって、降りきつた所で

「はあ、徐盛が帰つてくるまでは何とかやつてみるわ。今まで、やつてこなかつたしなー。蔣欽、歩シツ、2人とも帰るでー。技術畠のワイラがここにいてもしゃーないからな」

「ええ？ ちょっと主任？」

「……。失礼します」

韓当に呼ばれた2人は周囲を見渡した後、すたすたと出口に向かって歩いていく彼の後を追つていった。あまりの展開の早さに、頭を抱えている者もいれば、苦笑いをしている者たちもいる。

「太史慈さまがお決めになつたことですから、臣下である私たちが言つることもないのでしょうか……。帰つてきたら、私たちに本当のことをお話ください。太史慈さまの命通り、私たちが全力でこの地を守り抜きますから」

いつの間にか武官や文官たちの列から一步踏み出した所にいた費棟

がその瞳に涙を浮かべながら告げてきた。見れば藩臨からは鋭い殺気が向けられており、黄乱や尤突といった将たちからは訝しげに見られていた。費桟がこう言つてくれたつていうことは、彼女たちは費桟がなんとか宥めてくれるところらしい。

「ありがとう、費桟。今度、何か好きなものを贈ろう」

「そんなものはいりません。ただ無事に戻ってきてくださいれば、それでいいでしゅ」

部下に恵まれたな、俺。彼女の思い、そして藩臨たちの信頼を取り戻すために、俺は必ずこの建業に戻つてくる。

いい報告と共に。

その後、建業から出立した俺たちは西に向かつてまっすぐ行軍していた。俺は皆に勧められて馬に跨つているが、さつきからお尻が痛くてしようがない。何度も降りようと思つたが、降りようとする度に手綱を握つているウマが笑顔で「乗り心地はいかがですか」と振り返つてくるので降りられないでいる。

「あーるーーー、あーるーーー。わたしはーげんきー

行軍の先頭を行くのは赤い髪を揺らしながら陽気に歌つているチョウだ。ちなみに歌つている曲は「さんぽ」……何故知つている。その隣には、トレーデマークである犬の面を腰の携帯用のポーチに括り付けたケンがいる。彼は隣で歌うチョウを見ながら何度も溜め息をついている。とても今から命を賭けた戦いに行くような雰囲気

ではない。タツに至っては荷台で横になり、いびきを撞いて眠っているし。

だから、俺が乗っている黒い馬に並走している白い馬に跨っている美女が、頬を引き攣らせながらこんなことを尋ねてくるのは仕方の無いことだ。

「太史慈。貴方が鍛えた兵たちを侮辱するつもりはないのだけれど、……いつもこんな感じなの？」

「さあ、一昔前までは俺が命令したら人形のように敵を殺すだけの集団でしたよ。建業の街で民と暮らすことで、こんな感じになつていつたんです。中には家庭を持った奴もいるし……グギギギギギ」

辺りに俺の歯軋りの音が響く。まさか後輩だけでなく、部下にも先を越されるとは、無念。くそ、運命の神め。呪つてやる。呪つてやるぞおおおおおおー

「人形ねえ……」

と呴いた彼女は和氣藹々と自由気ままにしゃべる彼らを見て、何かを考え込むようにして俯いた。

分かつていると思うが、俺の隣にいる美女というのは孫文台その人である。馬がかづぽかづぽと歩く度に、彼女の薄紫色の髪が揺れる。そして、吳に住む女性特有の大きく実った母性が上下に揺れる。その光景を間近で見た俺はつい手を合わせて併んでしまう。なんと神々しいことか、先ほどまで荒んでいた俺の心がいとも容易く浄化されていく。

くつ……彼女が人妻でなければ、とつくの昔に……。

「落ち着け俺。ビーグールだ」

謁見の間で一悶着あつたが、出立に関しては大した問題もなくこうやつて太史慈隊のみで向かえている。藩臨の殺氣はマジでやばかつたが、費桟のおかげで追求されることはなかつた。

「及川にも言つたけど、俺の頭じゃこれが限界なんだよ。文台はもう仕方が無いって、最初から諦めていたし」

「自分が治めている地を襲おうとしている者たちの命も救おうとしている貴方に言われたくないわ。民の命を預かる王としては間違つた考えだと思うけど、……娘や私を慕つてくれる臣下のことを想つてくれているんすもの、個人的には嬉しいわ」

「あの時も言つたけど、救えるのは数人だからな。少なくとも率先して侵攻すると息巻いていた過激派の人間は助けないからな」

「分かつてゐる。生き残つても皆まとめて処刑されている所を助けてもらうんですもの、高望みはしないわ。助けて欲しいのは、娘3人と私の幼馴染2人とその娘が1人、長沙の太守となつた時からの付き合いのある臣下2人の8人よ」

8人。娘3人というのは、長女・孫伯符、次女・孫仲謀、三女・孫尚香。で、文台が全面的に信頼を寄せる臣下つていうのは周扇發、その娘周公謹、黄公覆、祖茂、程普の5人である。

「その他は侵攻に異存なしだつたつてことか?」

「…………」

質問に答える事なく視線を逸らす文台の姿に俺は肩をがくくじと落とす。

俺はふとDCPを懐から取り出して画面を確認した。

### 【▽暴走する孫堅軍】

- 『勝利条件
- ・ ? ? ?
- 敗北条件
- ・ 総大将の死亡』

あちらは6万、こつちは屈強な太史慈隊の兵士5000と2人。

さあ、この世界の命運を握る大事な一戦だ。

見せ付けてやる、この世界の人間に。俺たちの強さを。そして俺  
が考えた、綱渡りもいいとの策を。

11十語（讀書也）

書也なおすかもしません

母さまが殺されたという話を聞いた私は、自分の耳と目の前に立つ初老の男をまず疑った。

母さまは、彗星の如く突然現れ瞬く間に揚州の東側を手中に収めた太史慈の下に同盟を結ぶために向かつたと冥琳の母である優衣さんから話を聞いていた。

私個人としては、今までやつてきたように武力を以つて従わせたほうがいいと思っていたのだけれど、母さまも冥琳も優衣さんも祭も慎重になるべきだ。彼とは友好関係を結ぶべしだと主張してきた。それで先日、母さまは護衛も付けず単身建業に向かつた。私たちは母さまが帰つてくるのを、首を長くして待つていた。

だが、そこで告げられたのは母の死。そして、その首は建業の街で晒しものにされている。加えて、太守である太史慈からはその首を取りに来いという旨の文が届いたといつ。

母の死を知つて嘆き悲しむ者たちを奮い立たせ、私は剣に手をかけた。

「母さまの仇は私たちが討つ！お願い、皆の力を私に貸して」

私は母さまが育て上げた屈強なる将兵を率いてまつすぐ東へ、母さまを殺した太史慈の下へ向かつた。

だから、私に母さまの死を伝えた初老の男が私の背後でほくそ笑んでいるのに気付くことはなかつたのだった。

長沙から出立した直後は太史慈許すまじといつ熱氣が孫堅軍の将兵たちを包んでいたが、太史慈が治める領地に入り彼が治める村や街を見た将兵たちが、「話が違う」「民たちは皆笑顔だ」と会話しているのを何度も見ることとなつた。妹である蓮華も小蓮もしきりに首を傾げている。

心配になつた私は冥琳と優衣さんに話を聞きに行つた。そしたら、2人とも顔色を青白くして頭を抱えていた。

「やばいし、拙いし、いつたいどうすればいいんだ…」

「ふふふ、終わつた。これで太史慈軍と全面戦争になつたら、揚州全体が血みどろの戦場になつてしまつ……」

「兵たちには街や村を襲わないことを厳命させているが、過激派や保守派のアイツ等がどう動くか分からぬ。草の者達に目を光らせるように言つておかないと」

「冥琳ちゃん、それでは温いわ。そういうことをした者は、即刻処刑にしないと。太史慈軍と対峙した時、釈明が出来なくなるわ」

「…」れも雪蓮がアイツ等の言つ事を鵜呑みにするからだ！私たちが勝つたとしても太史慈の支配下にあつた村や街の人間が私たちに武器を向けてくる。負けたらここにいる将兵は皆殺し確定だ。…

太史慈が本当に文台さまを殺していたら大義名分を掲げられるが、もし文台さまが生きていた場合、私たちは長沙に帰れなく…いや揚州にいれなくなる」

2人の周りにいた兵士たちの雰囲気がどんどんよりと暗いものになつていぐ。私は物音を立てないように後退り、その場に背を向けて走つた。口元を手で押さえて走る。

軍から離れた所で立ち止まって空を見上げた。しかし、私が見上げた空には雨雲が掛かっていて、私の心中の状況を表しているかのようだつた。

眼前に広がる大草原に、燃え盛る炎のような赤い鎧を身に纏つた団が見えた。旗を見れば、大きく『太』の文字が。

「孫策さま、あいつらですぞ。文々さまを亡き者にした者たちは」

「……うん」

「そんな調子では仇を取ることなど出来ませんぞ。ここは我らが尖兵となりて、敵を討ちましょうぞ。皆のもの、我に続け〜」

そう言つて侵攻するんだと息巻いていた初老の男が5000人くらいの兵を連れて、赤い鎧を身に纏つた太史慈軍へ向かつて駆け出した。冥琳たちが何かを言つてゐるけど、もう止められない。勢いのついた軍勢はそう簡単に止められるものじゃない。止める方法なんて、それこそ敵を屠つた時か、私たちの目の前で起こつてゐるように返り討ちにあつた時だけ……。

この光景を見ていた「侵攻するぞ」つて息巻いていた過激派に所属する人間も、「後々掠め取つてやるわ」と言つてゐた保守派の人間

も、あちらの圧倒的な強さを予想していなかつたのか、顔を引き攣らせている。

「どうしようか…。

兵を率いてここまで来てしまつたんだもん。私はもう無理ね。

せめて、妹である蓮華たちや母さまが大事にしてきた臣下たちを生き残らせてもらえるように、命を張つてみよつかな。私は腰に差していた剣の柄に手を掛けた。

「雪蓮！」

冥琳が私に向かつて手を差し伸べてくる。

「……ごめんね、冥琳。皆が生き残れるように、私戦つてくれる。蓮華、シャオ、冥琳や優衣さんの言うことはちゃんと聞くのよ。私もたいになつちやだめだからね」

「姉ちゃん」「お姉ちゃん！」

2人が私の服を掴んで放さない。

私は祭と祖茂に目配せをした。すると2人は苦悶の表情を浮かべたものの、2人を私から引き離してくれた。

「策殿」

「我らもすぐに逝く。だから心配する」とはない。あちらでまた酒を交わそうぞ」

「あはは、うん。2人とも楽しみにしているわ。じゃあ、冥琳。私の生き様、そして死に様を見届けてね」

「……ああ、分かった」

「行つて来る」

私は悠然と歩みを進める。後ろから泣きじやぐる妹たちの声が聞こえる。耳を塞いでしまいたかった。

歩みを続ける度、死が刻々と近付いてくるよつたけど、私の心は意外と落ち着いていた。

瞼を閉じると色々なことを思い出す。母をまと稽古をした時のこと、冥琳と断金の誓いをした時のこと、蓮華と一緒に遊んで転んだあの子を慰めたこと、シャオと街を散歩して迷子になつた時のこと。

「あの時は母さまに「ひつぴどく叱られたつけ、ははは。……はあ、死にたくないなー。皆とまだ一緒にいたい」

けど、それを出来なくしたのは私自身。自分では確認していないのに、臣下から教えられた情報のみを信じて行動した結果がこれなのだ。そう私は自分に言い聞かせる。でないと、私の両手から零れ落ちる涙を止めることができないから。

赤い鎧の一団の先頭に金色の籠手をつけた背の高い黒髪の男と、薄紫色の髪を揺らす女性が立っていた。

恐らく太史慈と……って、

「母さまへ。」

「そりやよ、雪蓮。久しづぶり

「やつぱり、嘘だつたんだ。母さまが死んだなんて」

「（ちらり）……。実わね、雪蓮。私、太史慈の城で刺客に襲われたの。そこで手傷を負ったおかげで、長沙に帰るのが遅れてしまったの（棒読み）」

「そ、そりなの…？」

「でね、その刺客は太史慈との同盟をよく思わない連中が放ったものだとわかつて……。つまり、私は臣下の誰から狙われたことになるのよ（棒読み）」

「そ、そんなつ！？」

「私の隣にいる太史慈は状況を察知して、事が大きくならないように自分の部隊だけを連れてここに来たの。つまり、雪蓮。これから貴女の行動次第で、揚州の未来が決まるの。だから、何も言わないで死んだ振りをなさい」

「へ？ 死んだ振り？ そんなことなどなんとかなるの？」

「雪蓮」

「……さやあ、やーうーれーたー。（ぱたつ）」

私は大袈裟な声を上げつつ大地に倒れこんだ。心なしか母さまから可哀想なものを見るかのような視線を感じた気がする。

雪蓮が下手な演技で私たちの前に倒れこむと同時に、私の軍に動きがあつた。

私たち目掛けて攻め込んでくる一団と、我先にと逃げ出す一団。

「太史慈さま、我らに向かつてくる者たちは殺してはならない……、でしたね」

「ああ、その通りだ、ケン。ああやつて向かつてくるのは、孫文台と孫伯符のことを心の底から想つてている者たちだ。だから傷つけるわけにはいかない。むしろ、王が目の前で殺された（演技）のにも係わらず、その敵に対して背を向けて逃げ出すような輩に用は無い。後のことば、文台が自ら行つた」

「ええー、私はもう嫌よ。私ね、この戦いが済んだら優衣や祭と一緒に毎日おいしい料理を食べておいしいお酒を飲んで暮らすの。……建業で」

「ふざけんな」

即行で却下されちゃつた。

「ふーふー、私は断固講義するぞ。揚州は丸ごと太史慈が治めた方がいいのよ。私や雪蓮が長沙に戻つたって、彼らはどうにもならないの。太史慈が治めることになつたら、彼らは揚州の地を去るしかな

くなる。やつなるのが、この揚州に住む民たちにとつて最もいこ  
となのよ。

「長沙の民はどうするの、母さま？」

「雪蓮、死んだ振り」

「…………」

返事が無い、生きた屍のようだ。

さて、もつそろそろ眼のいい人たちが私の存在に気付く頃よね。

あ、先頭を走ってきた祭が目を丸にして驚いてる。その隣にいるのは猛火ね。彼の背中には蓮華と小蓮もいて、泣いているのか喜んでいるのか分からぬくらい顔をぐしゃぐしゃにしている。それに合わせて兵たちから困惑の声が上がり始める。確かに誰も経験した事が無いくらい、様々なことが起こっているわよね。

「これはどうこうことなの？ 美蓮」

状況が理解できていないのか、そんなことを口にしながら私たちに近付いてくる優衣。

「文台、誰なんだ？」

隣にいた太史慈が私に声を掛けてくる。

「大丈夫、彼女は私の幼馴染で名前は周扇發。私が最も信頼する人間よ。優衣、紹介するわ。彼が建業の太守である太史慈よ」

優衣は訝しげな眼で太史慈を見上げ、太史慈は頬をぽりぽりと搔きつつ苦笑いを浮かべるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6422y/>

---

『禁・三国恋姫』

2012年1月5日22時48分発行